

Jesus and His Life and Message

K. Kodaira, author.

1927, Oct.

KODAIRA

GTU Library



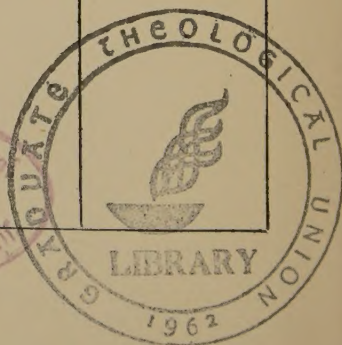
3 2400 00692 1369



小平國雄著

耶穌の生活とその使命

東京 基督教書類會社刊



信仰の自由を許せし父母に捧ぐ

BT 361

K63

1927

~~FS2~~

~~K816~~

序

嘗つてベルトランド・ラッセルが、人間には二つの衝動がある、一は所有の衝動、他は創造の衝動である。前者はあらゆるものを我がものにせんとする私の心、後者はそこに創造を試みんとする興ふる心である。

現代は改造の時代であり、ムーヴメントの時代である。あらゆるものは動かんとし、脱線の氣濃厚な時代である。ヘレニズムは高調せられ、唯物적享樂的思想が、社會人心に滲透して、腐敗退嬰の生活が暴露され、醜き恐ろしき貌を見る。世はヘレニズムに酔ふ時に予は「耶蘇に還へり」、唯心主義、生命主義、人格主義のヘブライニズムを主張するのである。ヘレニズムがヘブライニズムに依りて、思想的指導を受け、聖化するゝ處に、理想の社會、第一王國が創造するゝのである。ヘブライニズムはスピリットであり、ヘレニズムはバデーである。バデーのみを高唱するムーヴメントは、人間及びその社會を肉化し物質化してしまふ。されどヘブライニズムを中心として、初めてヘレニズムに力を與へ意義を與へて行くのである。そこに新しき創造を見る。

耶蘇の生活とその使命

目次

一 室なき旅舎（ルカ傳二ノ七）……………一

室なき宿舎 室なき世界 室なき人間生活

二 山腹ナザレの生活（ルカ傳二ノ四十）……………二

强健な肉體の所有者 充實せる智慧 神の恩寵と靈の
發達

三 荒野の四十晝夜の後（マルコ傳一ノ十三）……………二三

暗黒なる荒野 サタンよ退け 惡魔の現代化

こゝに述ぶる處は、福音書中の耶蘇傳を骨子とし、基督觀の一部を述べ。耶蘇が包含した人格と生活の使命を語るのである。『印度路の基督』の著者スタンレー・ジョンスの言に「宗教は生活實現である、然からずんば儀式化し、死滅してしまふ」と基督教にはローマの法的文化、ギリシヤの哲學、英、米、獨の神學思想が混然として流がれてゐる。されど耶蘇の生活、そは單にして純、そこに現代を指導し得る力がある。耶蘇の如く生き、思想したひとは印度人の叫びであると共に、現代世界人類の願望であるまいか、耶蘇の生活そこに指導的使命がある。精神的に荒野の如き東都の一角に予は十年一日の如く、耶蘇の福音主義、理想主義に基づき個人と社會生活の靈化を高唱しつゝ地殻を破つて獨語^{ウヅ}の大木の如く立つてゐる。不肖淺學菲才薄信のものなれど神田の教壇に於てかく信じて叫んだのが此の一ツの聲である。共鳴する信仰の友があれば満足であり、感謝である。

多摩川河畔の都市にて

著

者

識

一千九百二十八年九月

愛の廣さ 愛の長さ 愛の高さ 愛の深さ

八 創造の祈禱（マタイ傳六ノ十）……………八五

矛盾した二つの生活 生命の發電所へ 單純なるデヴ

オーシヨン

九 耶蘇の四大文字（ヨハネ傳十五ノ四）……………一〇一

來れ 從へ 居れ 行け

十 放膽の耶蘇（マタイ傳十二ノ十二）……………一一三

人間を恐るな 環境打破 社會を恐るな 放膽には靈

の泉

十一 ヘルモン嶺峰の白衣（マタイ傳十七ノ二）……………一二五

無限界に轉向せられたる體驗 靈界の分水嶺 道德の

四

ガリラヤ湖畔の人生劇（ルカ傳五ノ四）……………三五

從順の深味 協力の深味 謙遜の深味 人生に對する

使命の深味

五

耶蘇とその弟子（ヨハネ傳一ノ三五—三六）……………四七

生れ付きのヨハネ ヨハネにありし惡いものを取り給

ふ 心底にある最善のものを引出した 有せざりしもの
を與へられた

六

世界の中最も美しきもの（ヨハネ傳十一ノ

三十五）……………五九

耶蘇のヒューマニテ— 悲哀の人 涙の福音

七

愛の立體的宗教（エペソ書三ノ十八）……………七一

初子をうみ之を布に包みて馬槽に臥させたり

旅舎にゐる處なかりしが故なり。(路可二ノ七)

十二 神人融和の十字架（マルコ傳十ノ四十五）……………一三七

失はれし人を求めて 罪を負ふ神の羔 屠られる心

十三 園の中の新しき墓（ヨハネ傳十九ノ四十一）……………一四九

園に咲く赤き花 ゲツセマネの園 翌日越ゆる峰

十四 復活と久遠の靈潮（ヨハネ傳十四ノ十九）……………一六一

石の墓より轉びたるを見 空虚な墓を見 耶蘇自身を見

十五 第一王國の創始（ヨハネ傳十八ノ三十六）……………一七三

ヘブライ民族の理想 耶蘇の第一王國 第一王國の理想生活

室なき旅舎

「初子をうみ、之を布にて包み、馬槽に臥させたり。旅舎にをる處なかりし故なり」。耶蘇の兩親、ヨセフとマリヤとは、ダビデ王の血統を明かにし、ユダヤ民族の一員として、登録せんが爲めに首府エルサレムに向つて、ナザレ町を出發したのである。羅馬の政策からすれば、此の登録に依りて、人頭税を課するのが目的である。ユダヤ民族の立場からすれば、「民族の自覺」が主眼であつた。木工ヨセフは、貧しいながらも、臨月に近づいた、いとしき妻を驢馬を乗せて、彼女をいたわりながら、靜かな歩行を續けたのである。先きを急ぐ旅人の爲めに、幾ら追ひ越されたか、しれない。

此の若夫妻が、ダビデ王の建設にかゝるベツヘレムの町に、到達した時

マスの時に裝飾する様な電光のまばゆい明るい室ではなかつた。枯草と黒色に化した古い馬槽と、旅人を乗せた數頭の驢馬と、惡臭鼻をつく、糞尿に取り圍まれて、耶蘇は誕生したのである。ロマンテツクな想像をゆるさないまでに現實な空氣の中に、耶蘇は孤々の聲を發して、現實界の人となられた。貧しき木工ヨセフ、長子の誕生にもと用意した産衣もなく、母マリヤの硬き旅衣に、羽二重の様な柔かき嬰兒が包まれたことであらう。此の夜、此の誕生をいち早く喜び祝ふてくれた人々は、旅舎にある比較的立派な階級の人々でなく、貧しき牧童の一團であつた。純朴な神の飾らない精神を最もよく理解し得るものは、單純な心をもてる貧しき人々の群であつた。

「基督傳」の著者、ストウカー博士が、耶蘇の誕生を説明せんとして、獨乙宗教改革者ルーテルの誕生を述べてゐる。「今より四百年前、鑛夫ハンス・

は、太陽も西の端にかくれて、とつぷりと暗くなつた夕方である。旅舎には、先着の客で、満員の状態で、ヨセフとマリヤの着した時には、旅舎主は、已に室なきことをもて、斷つたことであらう。されどヨセフは、長途の旅程の爲め、これ以上臨月の妻が旅行を續け得ぬ實情を述べ、旅舎主も深く同情して、裏の馬小屋で、雨露をしのぎうべきことを告げたのであらう。疲勞したマリヤに取つては、その馬小屋も、疲れをいやすには充分であつた。

室なき旅舎

群衆をもて、喧噪を極めた客舎の一室よりか、裏の馬小屋の方が、遙か静かで、落付きがあつた。

伊太利の文豪バビニがその基督傳の中にものした様に、此の馬小屋は舊教に見る大會堂の如く、金銀寶石で飾られた馬槽でもなく又クリス

るが、若しこれのみが眞理なら、耶蘇もルーテルもウエスレーも、闇から闇へと葬られたではあるまいか。記憶せよ、嬰兒は神性の發現をもてる一の生命で、靈の蕾である。人工の技巧は、神の愚かさに劣るであらう。釋迦は王城に生まれ、耶蘇は馬槽に生まれた。馬槽に生まるゝことは、救主たることを妨げない。

室なき世界

耶蘇は降誕の瞬間より二十世紀の今日に至るまで世に容れられない。彼は税吏、罪ある人の友となり、賤しき家の客となり給ふた。彼は盜人の巢窟と呼ぶゝナザレ町に生長した。ナザレより何のよきもの出でんやと數段ひくゝ見られてゐる田舎町に生活した。彼は木工、弟子は漁夫、信者は税吏、醜業婦、罪ある人、世から棄てられた人の群が多かつた。學識ある人、高位高官、富める人は、彼を歡迎しなかつた。

ルーテルが、其の妻と共に、アイスレーベンの田舎町の市場に買物すべく出懸けた。その途中に、鑛夫の妻が、マルチン・ルーテルを産んだのである。貧しき鑛夫の家庭に、宗教改革の偉大な人物が生まれたのだ。

人間苦の中に産まれ生長したのが、革命兒であつた。十九世紀の豫言者と呼ばれたカーライルが、此の消息を叙述して、此の日全世界に於て、此の鑛夫とその妻ほど、目立たぬものはなかつた。然しこゝに偉大な人が生まれた。全世界はその人の出現を待つてゐた。吾人は今、一千九百年前に溯つて、更に一層賤しい境遇に於ける他の出産を想はずにはゐられぬ。奇蹟の時代は去つたが、奇蹟は、永久にあるであらう」と。どんな母にどんな偉大な子が生まれるか知れない。奇蹟は永久に奇蹟として續く。米國の大統領は、多くは富める家に生まれてゐない。

社會苦と人間苦の悲哀は、サンガー夫人の崇拜者の増加を齎らしてゐ

義愛中心主義が、未だ實現せられずにゐるのである。

室なき人間生活

耶蘇の安住をゆるすべき室は、ベツレヘムの旅舎にもなく、現代の社會にもないのみならず、我が心の室にも、彼を住はすべき空間がない。耶蘇の住むべき室は、靈性てふ旅舎である。人格てふ神聖なる奥の院である。吾人は果して、耶蘇を我が靈性の中に、主として迎へてゐるであらうか。

吾人各自が各々の人格を内省する時に、その内容を充たしてゐるものは、そも何んであらう。自分のみ正しとなす心、人を己れよりも卑しとなす心、人を惡み、人を惡口し、己れのみ清しとなす心、女を見て色情を起こす心根、財に飽くなきの心、私心私情、此等の情念が、全靈性を支配してゐる。人の成功を喜ぶ心さへもなく、却つて人の失敗を心地よしと見

權力、金力、野心、高慢、享樂は、人間の努力に依つて完成さるゝものである。こは神なしに人間の力でやり得ると人間は思ふてゐる。耶蘇が富めるものゝ救に至るは、駱駝の針の目を通るよりも六ヶ敷きことを洞破し給ふた。昭和の時代と自稱さるゝ現代に、水平運動の悲劇がある。近時群馬縣下に惹起された悲慘な迫害、異性の愛も、階級の相異や争闘の爲めに、一文の價值もなく棄てられてしまふその風致、そこにも耶蘇の入るべき室がないのである。

富めるものと貧しきもの、資本家と労働者、地主と小作人、人間の築ける此等の牙城、そこにも耶蘇の入るべき室がない。

更に強國と弱國、小國と大國、軍國主義の跋扈、そこには嫌惡、嫉妬の恐るべき力が漲みなぎつて、耶蘇の愛、共存の心が入るべき室がないのである。

世界はかくの如く、資本家、地主、軍國主義者の世界にして、耶蘇の人格主

トルストイを拒絶した、同じ心が耶蘇を拒絶するのである。否モット深刻な態度で耶蘇を拒絶する様な場合が實に多いことを幾らも體驗してゐるであらう。

何故吾等は、耶蘇を拒絶するのであらう。人間はあまりに打算的で、自己のこのみ思考し、自己の快樂、自己の罪のみに没頭してゐる爲めであるまいか。此等のものが人格の内側に充満して、他を容るゝ餘裕がないのである。ベツレヘムの旅舎に普通の旅客が充満して、耶蘇を容るゝ室のなかつたと同じ状態に我々の生活も耶蘇を容るゝ餘地がない。

耶蘇が我等の裡に宿り給ふならば、吾等の全人格も、耶蘇の如くなるであらう。水に鹽を投ずると形は見えなくなる。しかし無くなつたのでなく、水中の氣腔の中に解けて存在してゐる。なめて見れば鹹い、即

る賤しき心情が、殆んど全人格を占領してゐるのである。思ひ見るだけに慄然とせざるを得ぬ。

露國の都市モスクワで、貧しき風貌をした、文豪トルストイが、賤しき衣を着して、出版會社を訪づれた。彼は心血を注いだ原稿をもて行つたのであるが、外面だけを見、慾目にくらむ出版會社は、風貌の貧弱さを見て、直ちに玄關ばらひをやつたのである。でトルストイは、不滿の態度で、直ぐに去らうとした時、店員は「御芳名は」と尋ねたから、彼は「レオ・トルストイ」と答へた。するとその瞬間に態度をかへて、それでは是非出版を致しますからとて懇願されたけれど、トルストイは斷乎として、慾目にくらむ彼等の要求を斥けた。我れ知らずして、旅人をもてなしければ、それは基督なりきと云ふ神祕な消息を理解したき心、むらくと起きてくる。

幼兒は漸に成長して健かになり、

智慧みち、かつ神の恵その上にありき。(路可二ノ四十)

ち鹽あるが故である。若し我々の心を淨化して、靈ある耶蘇を溶解し、その内在を許すなら、耶蘇の如き人格の後光が、罪ある暗き我が身より放射するであらう。

山腹ナザレの生活

ナザレは、タボル山より五哩半、下ガリラヤにある町である。今はアンナシラと呼ばれて、七八千の人口を有する町で、山の麓にあるが、耶蘇が生活し給ふた時代には、海拔千六百尺の山腹であつたと云はれてゐる。稍々高地であつた。ナザレはヨルダン川の谷をいだき、ギリアテ山を遠く眺め、空の色と水の色と相接する地中海をも、目にをさめ得る處である。ナザレそのものは、比較的貧弱であつたが、周圍の風光からすれば、バレストイン半島に於ける恵まれたる地であつた。福音書に依れば、ナザレは、村(コーマ)と云ふよりか、町(ポーリス)と云はれてゐる(馬太二ノ二十三、路可一ノ二十六)。それは唯商業政治の中心地でなかつたと云ふまでのことで、ナタナエルが「ナザレより何のよきもの出でんや」と云

たか。昔も今も、山の多い場所より人材が輩出してゐる。耶蘇がナザレの高地に人となつたことも人間界の高峯となり得る、貴き暗示を偲ばしむる。

强健な肉體の所有者

「幼兒は漸に成長して健かになり」とは、恐らく母マリヤの口より洩された一言であらう。平均のとれた、立體的な骨格、頭と頸と肩とは筋肉逞ましく發達し、胸は前方に突出し、足は直立して、よく伸びたと云はれてゐる。

耶蘇は我々と同じ様に赤坊から少年期に進まれたのである。彼が生まれてより、十二歳までは、奇蹟的のこともなく、普通の少年として生活され給ふた。

往々にして、基督教は、肉體を輕んずることがある。肉體よりも、靈性が

ふたことが、ナザレの下劣なことを評したものであると一般に云はれてゐるが、最近の學者は、ナタナエルの意味は、そう取るべきものでない、彼は基督は、ベツレヘムより出づるてふ傳統を信じてゐたので、それはナザレからではないであらうと云ふたに過ぎぬと主張してゐる。故にナザレは、山の中腹に位した、靈感の刺戟豊かな高地都市であつたことをもて、記憶を新にしたい。

山と谷とに包まれ、遠く青藍の如き水を見るときに、塵と埃にまみれ勝ちの田舎町の生活にも、時々高められた氣分生活が繰り返されたであらう。

嬰兒耶蘇がこゝに生長し、成人となつたのも、偶然ではなかつた。古昔より「君子は山を愛す」と云ひ、ヘブライの詩人が、「汝の目を山に向けよ」と歌ふたのも、海拔一千六百尺の高原都市ナザレを歌ふたものではなかつ

將來牧師にならんとする人に、予はよく忠告することは、先づ健康であれと云ふことだ。

牧師は、夜となく晝となく、時間を超越して活動せねばならぬ職である。シエルドン博士が「今日労働者が八時間とか六時間労働とか叫んでゐるが、牧師の労働時間は、孰れの時代になつたら八時間になることかしら」と云はれたことがあるが至言である。人の心配も苦みも社會國家の重荷をも、我がものとして負ふて行くのが牧師だ。人の十字架をも時に負はねばならぬのである。かゝる重任を、蒲柳や病弱な身體でやり得ることが出来るか、耶蘇が三年間の御活動、枕する處なきまでの苦戦奮闘をなし得たのは、强健な身體の所有者であつたからである。松村介石氏の話に日本に於ける初代の基督者は、運動は罪惡であると思ふてゐた。松村氏が備中から東京に出てきた時に、宣教師が白い靴を

大切であると云はるゝけれど、そは一方に偏した考へ方だと思ふ。幼年時代の耶蘇は、成長して健かになつた。彼は蒲柳でもなく、病身でもなかつた。ベースボールやフットボールは、當時なかつたことであるから、なし給はなかつたが、山にも登り、徒歩競争もし、遊戯もし、泣きもし、笑ひもし、喧嘩もし給ふたことであらう。又時には、父ヨセフの家業である木工となり、少年労働者として、よく勤勉に働かれたことであらう。故に彼れの健康は、遊戯的運動と家庭的労働と、山腹の清き空氣と、熱を帯びた光線と、母マリヤの宗教的訓練、節制教育その宜しきを得て、强健な肉體の所有者となり給ふたことであらう。

健全なる精神は、健康なる肉體に宿るとは、耶蘇に於て、目撃し得る事實である。眞に徹底した信仰を有する人であるならば、その人は健康な人である筈だ。

智慧は學校教育、讀書勉學に依りて與へらるゝものでない。かゝる努力に依つて得るものは知識であつて、智慧ではない。知識は後天的であるから、教育其他の訓練に依りて與へられるけれど、智慧は先天的で、生まれながらにあるもので、智と云ふよりか寧ろ心情である。知識は水道のパイプを流るゝ水の如きものであるとすれば、智慧は、掘抜井戸の深みに涌き出づる水の如きものである。彼が敬虔なる聖母マリヤの膝下にありて、舊約書を読む時に、彼女の溫情に接し、碎けたる心もて神に祈る雰圍氣に包まるゝ時に、溫室で咲く花の如く、耶蘇の智慧は發芽し葉を生じ花が咲き果を結んだのである。

かくして充實せる智慧が、聖書に向へば、眼光自ら紙背に徹し、意自ら通じ、囀る鳥、野に放たる羊、雲峰に聳ゆる山、折られたる葦、その中に神の聲を聞き、人間生活の堂奥をさぐり、神の默示を見、靈界の消息を極めたの

はきテニスをしてゐたので、彼は罪惡を犯してゐるとして抗議を申込んだと云ふ奇談がある。身に適したる運動もし、勞働もなして、神殿とも云ふべき肉體の強健を獲得することが、人生の重大なる問題の一つである。

充實せる智慧

耶蘇の健全なる肉體に、はりきる程に智慧が充實した。大男總身に智慧が廻りかねと云ふたことが、人間生活の中に、ザラにあることである。獨活の太木の様に、外面は立派でも、空虚なるものは、風が少し強く吹けば倒れてしまふ。處が耶蘇は、血色漲ぎつた中に、充實した智慧もて健全な筋肉の内容を豊かならしめた。身體が發達しても、心的には一寸法師の様な人間のあるのが世の常事で、かゝる環境の中に耶蘇は、身心共に圓滿に生長し給ふたのである。

五合目位の處には、小さな權木だけ生えてゐるのを見る、更に上に登るに従ひ、火山の爲めでもあらうが、何等の草木がない。自然の恵みの豊かでない處には、草木其の生氣を失ふてしまふのである。

夫の同情のない家庭にありては、妻はヒステリーになり、愛なき妻のあつる處には、夫は自暴自棄になる。親の溫情なき處、そこに不良少年少女が巢をくふのであるまいか。

神の溫かき恩寵に包まれて、耶蘇の靈的生命が、天界に向つて伸び得たのである。陽春の溫ぐみのある處に、春雨が注がれると、梅はその蕾を破つて、芳香を放つ。旃檀は二葉より香ばししと云ふが、如何に旃檀でも、小笠原島の如き溫暖の地に於て生長するので、その香もよいのであるが、寒氣身を刺す北海の地では枯死してしまふであらう。神は愛であり恵みである。その愛と恵みが耶蘇の靈的生命を遺憾なく發達さ

である。内に充ちた智慧、光輝の發する處外界の刺戟暗示に對して、レスポンスするのである。此の智慧の力が、機械的な人生を洞破透徹して、新らしき世界を發見し、慾と罪の生活の中に、耽溺してゐる人々に、靈味津津たるヴィジョンを見せたのである。行詰り勝ちな人生に、無限の深みを發見したのが彼れの内に充たされた智慧であるまいか。此の智慧が、人間の中と外とを創造して今尙進化して止まざらしむるものである。

神の恩寵と靈の發達

神の恵が耶蘇の靈的生命の上にあつた。體育、智育、靈育此等の三要素は、耶蘇に於て、完全の境に達した觀がある。風浪の荒い海邊に生ずる松柏は、不斷の壓迫に依りて、その枝や幹が屈曲してしまふ、富士山に登る時に、本宮口から行くと麓から四合目頃までは樹木が茂つてゐるが、

企圖し給ふ。天使ガブリエルが、聖母マリヤに降りしもナザレであり、ヨセフとマリヤが、嬰兒耶蘇を抱へて歸りし處もナザレであつた。マルコの傳ふる處に依れば、耶蘇が洗禮を受けんとして、ヨルダン河に降りし時もナザレより出發し給ふたと云ふことだ。

かくの如くナザレは教養の時代、準備の時代、戦場に出でんとする戦艦のドックである。筋肉と智慧と靈的生命の完成された靈場である。ナザレそこには久遠に、汲めども盡きざる生命の源がある。

せたのである。神は耶蘇に於て、靈的生命の完成を企圖し給ふた。換言すれば肉體智慧靈性と漸次に來れるものでなく、神の恵みが靈を活かし新にし其の結果智慧がみち、肉體が完成する。原因あつて結果あるのである。

英國に於て、嘗つてウエストミンスター^{Westminster}の信仰個條を作成する時に、知名の博士教授牧師が集まつて、神のことを説明せんとせしも、碩學者等は、その洪大尊嚴なるを思ふて、誰一人として、言ふものはなかつた。するとその中で、の年少者であつたジョージ・ギレスビー氏が「ア、神よ、汝は靈にして存在し給ふ、全能全智至愛に在して、聖子をさへ降し給へり」と禱つた。これが遂に受入れられて信仰個條となつたとのことである。

靈なる神は、靈なる耶蘇を誕生せしめ、更に耶蘇を通して、人間の靈化を

荒野にて四十日の間サタンに試みられ、

獸とともに居給ふ、御使たち之に事へぬ。

(マルコ傳、一ノ十三)

荒野の四十晝夜の後

バプテスマのヨハネに依りて、ヨルダン河に於て、洗禮を受け給ひし耶蘇は、直ちに御靈に導かれて、荒野に行き給ふた。洗禮ををはりし瞬間、御靈降りて、こは我が心になふ我が愛子なりとの天來の聲に接し給ふた。喜悅と希望と高められたる氣分の漲ぎつた時、誘惑の手が、耶蘇を荒野に誘ひ出した。

耶蘇の人間性が試みられん爲めであつた。

暗黒なる荒野

耶蘇が孤獨で行き給ふた荒野は、死海とヨルダン河の間に面した處であつたと、地理學者が云ふてゐる。そこは人の住まない、荒廢した不毛の沙漠である。熱氣の強い熱帶の太陽が爛として直射してゐる。沙

儒者が「小人閑居して不善をなす」と戒めたのも人間の弱點は人目より遠ざかる時に發してくるものであることを觀破したのであらう。君子は「獨りを慎む」と云ふが、君子とも云はれるまでに修養の出來上つた人にして始めて、自らおさむることが出來るのである。

暗黒なる荒野、しかも四十日四十夜、耶蘇は飲むことも食することもせず、其結果四十日目に俄かに、食欲の猛烈なるものに打當つたのである。なんぢ若し神の子ならば、命じて此等の石をパンとならしめよ」と。パンの缺乏を感じてゐる時に、パンに對する誘惑が先にくるのである。物質の缺乏する處に、物質の誘惑がくる。

明治時代に、我が教育界に教科書事件なる不祥事が突發したことがある。金港堂その他の書籍會社が、自社より出版せる教科書を採用せしむる爲めに、知事、中學校長、師範學校長などに收賄せしめ、一時教育界の

はやけて火事場よりでも吹く様な熱風が、時に沙塵を卷いて慘たる風光を呈する。木もなく、泉もなく花も咲かない。夜にでもなると、荒れた寂寞の中に、黒味を帯びた濃厚な暗味を投ずる。人の聲もなく、助けも同情もない、人界を遠く離れた寂しい地、そこがサタンの選んだ戰場である。モーゼがエジプトのパロ王の前にありし時は、實に正々堂々、一糸亂れざる戰陣をはつて、ヘブライ民族の救の爲めに奮闘したが、一度アラビヤの荒野に民衆と共に滞在すると、彼の忍耐の心が破れてしまつた。宗教改革者ルーテルが、當時の獨逸帝王チャールス第五世の面前に、裁決さるゝ時には、恐れながらも、大膽に彼の主義主張を明かにし得たのであるが、ウエツテンベルヒの城内に於て、單身聖書翻譯の大業を開始した時に、惡魔彼に現はれ彼を誘惑し、その時彼はインキ壺を打ちつけて、之を追ひやつと、そは彼の傳をものせし人の言である。

世の人々はパン問題を解決しても、靈の問題は未解決のまゝにある事を知るべきだと想ふ。耶蘇は神の言を中心としてパンの問題を解決し給ふた。第二の誘惑は「神の力」を試みんと魔手がのばされた。第一の誘惑にて耶蘇が「神の言」と云ひ給ふたに對し、惡魔は、さらばその神があるならば、「己が身を下に投げよ」と云ふのである。聖なる都市の高い宮より、耶蘇を飛び下さんとした。よく人に煽動されて得意になる時にかゝる誘惑がくるのである。耶蘇は惡魔の心底を洞破して、「主なる汝の神を試む可らず」と言明して、神中心の信仰もて之を打破し給ふた。

サタンよ退け

事實サタンは人格的存在者であるや否やとは多少の議論のあることであらう。ヨブ記の中のサタン、ゲーテのメフエストフェレスの如き、肉眼に映ずるものであらうか、それとも精神的なものであらうか、恐ら

腐敗を暴露したことがある。予はその時に想ふた、收賄したのは、夫たる人々であつたが、彼等の蔭げに物質の慾求をそゝる妻女があつたのであるまいか、實際の罪人は意外な方面にあつたであらう。耶蘇がバンの缺乏を感じ給ふた時に、沙漠に散在せる石さへも、バンの如く黄色を帯びて見えたであらう。そこに「石をバンとせよ」との惡魔の聲がきこへたのである。

此の時、耶蘇は「人の生くるは、バンのみに由るにあらず、神より出づる凡ての言に由る」と斷じて、靈主物從の劍をもて魔性の聲をしりぞけ給ふた。現代の勞働運動、社會改造は、バンのみの要求である。而して耶蘇がバンを第二義にせしを難ずる人が多いが、それは誤解で耶蘇は決してバンを輕んじ給ふたのでなく、バンよりも更に大切な神の言を重んじ之れに依ればバンの問題は解決し得るのであるとなしたのである。

令夫人が、五千圓の帶地を注文した。そはその夫人の友なる夫人が、一千圓の帶地を買求めたのを見て、それではと云ふので自分は五千圓のものを注文したのなそうだが、三越の方からすれば、實際そんな高價な品物が、京都の織元にもないので、一千五百圓位のものに五千圓の札をつけて注文に應じたとのことである。榮華にあこがれる人の心を満たすのはかゝる愚にもつかぬことが多いことと察する。

若しも耶蘇が、薄ペラな考をお持ちであり、刹那主義の方であありであつたら確かに此の誘惑にかゝり給ふたことであらう。されど洗禮を受け、四十晝夜、斷食して祈りし曉には、かゝる淺薄な世俗的な名譽心を超越し給ふてお居になつた。モット深い人生の妙味に觸れてお居でゝあつた。故に彼は直ちに「サタンよ退け主なる汝の神を拜し、たゞ之にのみ事へ奉るべし」と、權威をもて叫び給ふた。これは確かに拜金

く後者に屬すべきものであらう。サタンと神の存在を認むることに
なれば、二元哲學になる、バビロンやペルシャの宗教の如く、善神惡神の
存在を基督教に於ては認めない。宇宙てふ大な問題からすれば、神の
みの實在を是認する一元の哲理を基督教は主張する。さりながら人
間界に於ては、人間の心的内容に於て、自我以外に働く惡の力の存する
ことを認めなければならぬ。耶蘇の誘惑も、サタンは客觀的なもので
なく、主觀的なものであるまいか、哲學的神學的の推理よりか、サタンの
存在は體驗的なものであると想ふ。そこに人間耶蘇が此の誘惑にか
ゝり給ふたのである。

惡魔は又耶蘇を最も高き山につれゆき、世のもろくの國と、その榮華
とを見せて言ふ、「汝若し平伏して我を拜せば、此等を皆汝に與へん」と、人
間慾望の通弊は、榮譽榮華にあこがれることである。例へば三越に某

負をもて、人類救拯の途上につき給ふたのである。

惡魔の現代化

現代の惡魔は、メフエストフェレスの如く、角の生へたものでもなく、ダ
ンテの神曲の地獄篇にある、人を食する、口の大きいルスファの如きも
のでもない。牙があつたり、爪の長い鐵棒を持つた、こはい恐ろしき生
物でなく、美服美顏、或は人の爲め、同胞の爲めと自稱して、近づいてくる。
親み易く、親切さうな貌かたちをしてくるものである。藝術の友、趣味の友、男
女交際、舞踏會、夜會の名目の下に、友として味方として接近してくるも
のである。時には自動車に乗り、シルクハットを被る紳士ともなり、又
はヴェールを被つた淑女ともなつて來るのである。故に最初は恐ろ
しくもなく、醜くゝもない最も美しく、親切てふカムフラージュをして近
寄る個人であり又群である。角のある恐ろしきものなら近づきもし

者、拜物主義者に對する耶蘇の挑戰である。サタンを拜せず神を拜せよとは耶蘇の衷情よりの叫びである。

獨逸のカイザルが、世界大戰前に、キール軍港に於て、獨逸海軍の觀艦式を舉行し、戰闘艦の内と外とを身親しく檢閲した。戰艦の機械、ボイラー、速力、大砲、武裝せる鐵板、ボルト、發砲力、詳細に渡つて試運轉をなしたと云ふことであつた。神が耶蘇を、人間の靈戰に送くり給ふ前に、誘惑の山に於て、あらゆる方面より、耶蘇のヒウマニターを點檢し、内も外も大丈夫であることを認め給ふまで試み給ふたことであらう。換言すれば、耶蘇の荒野の誘惑は、神の觀艦式である。荒野の四十晝夜の後、耶蘇の人間としての價值が確定されたのである。此の試練に堪え打ち勝ち得た後に、彼は初めて靈界の先陣を承り、神の使命を敢て地上の間界に於て完成し給ふた。「我を見しものは神を見たのである」との抱

に落下すると、毒蛇は此のユツバスの葉を嫌ふて、直ちに逃げてしまふので、巢の中の小鳥が安全であつたと。母鳥のかゝる行動は、本能的に動く神々しき愛がほとばしつて、毒蛇を追ひはらふのである。神秘的な宇宙の表現であるまいか。

人はバンのみにて生くるものにあらず、神の口より出づる凡ての言に由ると云ひ給ふた消息は、母鳥がユツバスの一葉もて、毒蛇を退けし如く、吾等の如く弱きものは神の言、神の力をもて、ムラ／＼とおし寄せてくる悪魔を退け、神を拜したゞ之れにのみ事ふべきものである。人生の勝利は、かゝる貴き一面より來る。

まいが、美しき立派な人としてくるので、心をゆるし、油斷をして遂に一生取り返しのつかぬ失敗に陥ることの實に多き世事の悲慘を悲むのである。

米國のハワイ島に、ランプフイツシユ(ランプの如き魚)と云ふ魚がある。大きな口で、顎には長き齒があつて、鼻の先きには、卵の如きものをもつて、空腹を感じると、その一點が恰かもランプの如く、光を發するので、海中のことであるから、小魚が、面白い光と思ふて集まつてくると、口を大きくあいて、その魚が小魚を食ふてしまふのである。かゝる類の出來事が地上至る處にある。光とか花とか美しく見ゆるものに、惡魔の陷阱があることを知らねばならぬ。

南洋ジャヴァ島を旅する人の記事に、毒蛇が巢の中にある小鳥を襲ふ時に、母鳥が飛び上がつて、ユツバスと云ふ樹の葉を取り、之を毒蛇の頭

語り終へてシモンに言ひたまふ、

深處に乗りいだし綱を下して漁れ。

(ルカ傳、五ノ四)

ガリラヤ湖畔の人生劇

ガリラヤ湖は、南北十三哩、東西七哩で、地中海より六百呎低い湖水である。此の湖のほとりに立ちて、耶蘇イエスがその渚なぎさに二艘の舟あるを見たまふた、その時に漁夫は舟を出で、網を洗ふてゐた。耶蘇はその一艘なるシモンの舟に乗り、舟より群集を教へたまふた。語り終へてシモンに言ひたまふ、「深處に乗りいだし、網を下して漁れ」と、するとペテロは、「君よわれら終夜勞したるに何をも得ざりき、然れどお言に従ひて網を下さん」。かくせしに魚の夥多しき群が網に入り網さけかゝりければ、他の一艘の舟の援助を受けると、魚は二艘の舟に満ちあふれ、舟が沈まん許りになつた。之を見たシモン・ペテロは、耶蘇の膝下に平伏して、「主よ我を去りたまへ、我は罪あるものなり」。これはペテロも他の人々も、魚

遠の人生劇のオーケストラが奏されたのである。

從順の深味

岸邊の淺瀬に、住んでゐる魚は小魚のみであつた。云はゞそれは人生の間口である更に深い處に行かねば、大魚が住んで得ない。故に彼はペテロ等に向ひ「澳へ出でよ」と命じた。ペテロは直ちに「御言に隨ひて網を下さん」とて耶蘇の命に従ふて澳へ出で深き處に至りて網を下したのである。こゝに人生從順の深味がある。此の時に於て若し耶蘇に彼等が従はずして、深處に出でざりしならば、彼等の獲物がなかつたのである。のみならず失望と落膽と疲勞にのみ満たされたに過ぎなかつたことと思ふ。

今や彼等漁夫は、知らずして人生の深味に、竿さし、そこに福音の網を投じたのである。吾等も耶蘇の聲に従順に服する時に、人生の底知れざ

の多きに恐いて耶蘇の凡人でないことを知つたからである。すると耶蘇は沈靜な態度で「懼るな、なんぢ今より後、人を漁らん」と言ふや、彼等舟を陸につけ、凡てを棄てゝ耶蘇に従ふた。

「澳^{おき}へ出でよ、改譯では「深處に乗りいだし」とあるが、こゝは舊譯の方が意味深く思はるゝ、人生の澳へ出でゝ漁る時に、更に深き人生の意義を發見し得ることが出来る。

耶蘇はガリラヤ湖を一つの人生劇の舞臺となし、ヨルダン河を花道として、そこに人生最深の意義を有する人生劇的一幕を演じ給ふた。

耶蘇は海を愛した方である。ガリラヤ湖上波浪の中に、耶蘇は久遠の音楽を聞いた。彼の靈性の琴線に波浪の震動が觸れた時に、人生最深の妙音を理解し給ふた。彼は人間生活の中に、海や星の群の中にも、調和された交響樂を聞き得た。——耶蘇と漁夫、浪と陸、海と星、そこには久

容易に解決し得る眞理をこゝに於て發見し得るのである。

人生問題を顧みる時に、世俗てふ淺瀬があり、マルクス主義と云ふ岩石があり、戀と云ふ渦卷があり、商業主義てふ霧がある。右すべきか左すべきかと迷ふことが實に多い。

現代の諸問題を解決せんとせば、協力の必要を感じずる。一人だけでは或は少數だけでは、やり切れないと云ふ場合が多くある。爲政家と國民の協力、資本家と労働者との協力、人と人、國と國との協力が、遺憾なく實行さるゝ時、更に神と人との協力が實現さるゝ時、人生に新らしき問題の解決が促がされてくる。

謙遜の深味

ペテロが耶蘇の命に依りて、澳へ出で網を打つた時に、獲物の多かつたことを見、耶蘇の洞察力の非凡さを見て、「主よ我を去りたまへ、我は罪あ

る深みに漕ぎ出で、その奥深くある人間の靈性を獲得することが出来ることと思ふ。人は怒りと苦痛の波浪の逆卷く處に、翻弄されて迷ふてゐる。その時に耶蘇は「澳へ出でよ」と命じ給ふ、吾等は之れに従ふことである。かくせば凡ての難問題も、立處に氷解してしまふであらう。

協力の深味

澳へ出で、網を投じた時に、大漁ありて一艘の舟のみでは、收容し切れなくなつた。そこで他の一艘の舟にをる組の者を差し招ぎ來り助けしめ、二艘の舟に満載される程の大漁があつた。

二艘の舟が協力した時に、始めて捕つた丈けの漁を收容し得たのである。こゝに人生協力の深味があるのであるまいか。

隣人の必要に應じて、助くる時に不可能とされたことも、意外に早く又

詩人ブラウニングが、「ビツバは過ぎ行く」と云ふ詩の内に、老いたる水車場主の妻オツテマが、戀人なるセーバルドと、毒を飲んで死ななとなせし時に水車場に働いてゐる無邪氣な娘ビツバが、喜々とした心で、捕はれざる自由の氣分で、歌ひながらその近くを過ぎ行くのである。

一年は春、一日は朝、朝は七時こそよけれ、

小山の麓におかれたる露は、眞珠の如く光る。

雲雀は翼にて飛び蛇は棘林イバラの下にかくる、

天には神あまし給ふ、凡てよからざるなし。

人妻と不義の戀に陥りしセーバルトが、此の歌を聞き、恰かも天來の光に打たれたる如く釋然として悟り、救に至るの情味が美しく叙されてゐる。

人生に對する使命の深味

るものなり」と告白した。私の様な價值なきもの、短見淺慮のものは、主の如き方と共に居る價值はありません。何卒我を去り給へと叫んだ處に、ペテロの謙遜の深味がある。高慢な態度をすつかり去つて、碎けた心の所有者として、ペテロが耶蘇の前に出たのである。「實^みのれば實^みのる程、頭の垂るゝ稻穂かな」と云ふ俳人の詩想があるが、學問のある人程謙遜で、稻穂でも、人間でも實の入らぬものは、ツンとして頭を上げてゐる。

主よ我を去りたまへ、我は罪あるものなり。罪あり缺點ありと自覺した處に、ペテロの耶蘇に依りて救はるべき可能性があつた。パウロが、「我は罪人の親方である、嗚呼我れ惱める人なるかな、此の悩みより我を救はんものは誰なるか、主耶蘇キリストなるが故に、我れ彼に感謝す」とは、靈性の危機に際して、パウロが靈覺した時の消息である。

從順、協力、謙遜の徳を見たであらうが、更に汝の目を我に向けよ、而して恐るる勿れ、今後汝は「人」を獲得すべしと。

神が吾等に命じ給ふ使命は、金錢でもなく、名譽でもない、基督を通じて、人を得ることである。之れが人生に於ける、最貴最高の使命であることをもつてした。人生のガリラヤ、人生のゲツセマネ、人生のカルバリーのほとりを逍遙する時に、神人耶蘇の愛に抱まれて靈性の深味に、貴き我を發見することが大切である。

クリミヤ戦争の時に、佛國チュウロンに於て、聖書會社の出張員が、まさに出陣せんとする兵士に聖書を求めん事を以てした。一兵士が云ふには「一體これは何んですか」と、出張員が答へて「これは神の言葉です」と、それなら一冊ほしい」とて買求めて、戦場へと行つたのであるが、途中心の内には、ウンこれは、煙草を吸ふ時の附木タキツケによい位に思ふてゐた。處

己れの薄信弱小なることを告白したペテロに向ひ、耶蘇は「懼るな、なんぢ今より後、人を漁らんと。生活の爲めに、漁夫として終日終夜働いて、獲物なく疲勞をのみ感じてゐる漁夫の群、生活の爲めの仕事、食ふ爲めの人生、そこには何等貴き人生の意義を見出し得ずに、行詰り勝ちなるものゝみである。耶蘇はかゝる漁夫に對し、更に高き且つ深味のある人生の意義を提供した。生活の爲めの人生でなく、使命の爲めの人生をもつてした。今迄のペテロは、木の葉の船で、大海を航海してゐた様なものであつた。恐れをのゝく靈の所有者で、人生の荒浪の中に動揺してゐたに過ぎなかつた。その懼れをいだく靈をもてるペテロ、今や耶蘇の神々しき愛に抱かれた。そこに恐れなきのみならず、男々しき「人を得る使命へ」と導かれたのである。

ペテロよ、我は汝の靈の深さを汝に示すであらう。汝は人生に於ける

人生劇の舞臺はガリラヤ湖、花道はヨルダン河、その背景はレバノンの山、そこに耶蘇と漁夫とが、人生問題を中心とした、大きなドラマを演じた。ペテロ及びその同輩は、船を棄て、耶蘇に従ふた。こゝに人生獲得の序幕が開かれたのである。澳へ出でよ、個人靈性の奥へ、社會生活の奥へ、教會生活の奥へと、耶蘇は吾等を導き給ふ。

が白兵戰に於て、彼は重傷を負ふて歸つて來た。母親はその急報に依り、負傷せし愛子の入院してゐる病院にかけつくと、間もなくその兵士は死んでしまつた。後に母親が兵士のポケットに聖書のあるを見出して、嗚呼これで倅も安神して死ぬことが出來た」とて悦んだとのこと、その聖書の前の五六枚は破れて居つたが、聖書の中に、兵士の肉筆で「こは出陣の時、チュウロンにて得たる書なり、予はこれを侮り、見棄て、讀み信んじ而して救はれたり」と書いてあつた。

人生湖畔の淺瀬にをる時には、吾等は聖書も耶蘇も神も侮り見棄てゝゐるのである。小金を貯へたり、商賣が少し繁昌してゐると、得意になつてしまふのが人間の弱點である。耶蘇はこんな小さい慾望の満足、湖畔の淺瀬で満足せず、澳へ出でゝ漁れ、モット深い處に、魚が澤山をる様に、人間の靈性の深い處に、最も貴き眞珠のあることをさとされた。

明くる日ヨハネまた二人の弟子とともに立ちて、

イエスの歩み給ふを見ていふ視よこれぞ神の羔羊^{こひつじ}

(ヨハネ傳、一ノ三五—三六)

耶蘇とその弟子

神國の建設は、ヘブライ民族を中心として、世界に實現すべきものであると云ふ信仰そはヘブライ民族の傳統であつたと同時に、耶蘇御自身の確信であつた。故に彼はヘブライ民族十二種族になぞらへて、十二弟子を選び給ふた。此の十二弟子を中心として、新イスラエル、新エルサレム、新らしき第一王國(神國)を創造し、これを完成せんとし給ふた。

故に彼れが選擇せし人物は、野の人である、而して抽象的な言葉や思想にのみ没頭する人でなく、實際の事物や人間を了解し得る人々であつた。文字の模倣に依りて支配さるゝものでなく、美しい自然に流がれ出づる靈的生命の自由に依りて行動する人間を選び給ふた。人格が人格に觸れ人格を通して、人を生かし得る人物を選んだ。此等十二弟

し得るのである。耶蘇が彼れに「雷の子」と綽號を附し給ふたのも所以のあることである。烈火性急のヨハネをよく描寫し得る言葉であると思ふ。斯くの如く、生れたまゝのヨハネは、野心家で、利己的な烈火の如き怒りばい、猛烈な氣早い人間であつた。

ヨハネにありし惡いものを取り給ふ

英國の詩人ブラウニング夫人が、牧師で社會運動家のチャールス・キングスレーに、「貴下の人格をかくも美しいものにした秘訣はどこにあるか」と問ふた時に、キングスレーは、「我は心の友を持てり」と答へたと云ふことである。ヨハネは耶蘇と云ふ親友、心より心に觸れてゐる救主を有してゐた。當時の耶蘇は三十歳、ヨハネは四十八九歳であつた。常に耶蘇に最も近く座席を取るのがヨハネで、耶蘇はヨハネに取つては、靈の影法師の如きものであつた。

子の中、ヨハネと耶蘇の關係を見、耶蘇の弟子に對する感化を偲び度いと思ふ。

生れつきのヨハネ

生まれつきのヨハネは、野心に満ちた、利己的な、自我心の強い心の所有者であつた。彼が弟ヤコブと共に、若し耶蘇が成功した時には、兄弟で左右の大臣にならうとして、其の旨を母を通して、耶蘇に申し出てゐる。又ヨハネとヤコブが、耶蘇と共に、エルサレムに向はんとした時、サマリア人の或る村を通過せんとして至れる時、村人は耶蘇を受けなかつたので、ヨハネは「主よ、我らが天より火を呼び下して、彼らを滅すことを欲し給ふか」(路、九ノ五四)と、耶蘇に向つて云ふてゐる處を見れば、彼の心中には、サマリア人に對する民族的偏見、宗教的偏見が濃化してゐることを見る、即ちヨハネは復讐づきな、短氣な男であつたことを瞭々と目撃

のは、多くの場合に於て表面的な現實的なものである。人間は意識の世界に於て、罪も犯かし惡もなすのである。心理學者が云ふ第六感の作用、潜在意識の中に、奥深く秘されたる眞我が引き出されてきた時に、肉體の多くの病も癒やされ、人間が靈覺し始むる時に、意識の世界にのみありて煩悶し悲み、悩んでゐたものが、丸で新しき世界の内に自己を發見し得るのである。

耶蘇はヨハネの心底深く忘れられてゐた眞我を引き出し、彼れが靈性の全運動を催かし給ふた。而してその靈性の漸進的發達を企圖し給ふた。かゝる消息の中に、ヨハネの靈性は、枯木に花の咲いた如く、自己深く内に醒め始めた。かくして最深最高の「我れ」を發見したのである。ヨハネが耶蘇に於て、眞友を見出し、全人格の表現を見出した時に、彼自身の中に、全人格の風貌を發見したのである。

耶蘇は園庭師が、春秋家の植木を鋏もて刈込み、新らしき芽を出させる様に、ヨハネの悪い處、短所缺點を除去し給ふた。高慢な利己心を打碎いて、ヨハネの心底深くはいり込み、そこに秘藏された純眞な我を引き出して、丸で新らしき心情を附與し給ふ。二三年間のかくした耶蘇とヨハネとの關係が、遂に雷の子を溫厚な好々翁の如き人物になし給ふた。利己的な復讐的な氣早い性情が、古るい木材に打込まれた釘が、木工に依りて抜き取らるゝ様に取り去られた。その結果ヨハネは鳩の如く溫厚に、母の如く親切に、天使の如く慈愛深くなつた。

ヨハネが耶蘇に觸れた時に、彼の人格と耶蘇の人格と相接觸した時に、ヨハネの短所缺點が殆んど全部取除かれてしまふた。

心底にある最善のものを引出した

人間の至情は眞であり善であり美である。日常生活に於て動き働く

耶蘇がヨハネの心情深くある自我を引き出し、それを調節し調和した時に、ヨハネは十二弟子の中で最も耶蘇に近き人格者と化した。

有せざりしものを與へられた

ヨハネは、耶蘇より未だ彼れが持たざりしものを彼れの人格に與へられた。惡るきものを去り、よきものを引き出し、此の二つの階段だけで耶蘇が止め給ふたなら、彼は一個の教育家に過ぎなかつた。然し彼は更にヨハネになきものを與へ給ふた。耶蘇が教育家以上の教育家、救主たる所以がこゝにある。ヨハネは耶蘇に依りて、人生に對して新らしき見解を勝ち得た。人生は極限された、小さき世界、有限な、行詰まるものでなく、無限な擴大された中に生くべきものであることを知つた。神を知らざる人生は、闇の中に、實をさがす様なものであるが、神を信じた瞬間に人生は光であり希望であり感謝であることを知つた。神を

誰れでも、彼れが現在見られてゐるものよりかは更によき貴きものを有してゐる。植村正久氏か千葉の九十九里の蓮沼に生まれ、十一歳の時實父と共に横濱に出で、豚飼をし、十五六歳まで自宅教授を受けた人である。實父の歿後は、上總より薪木を仕入れて商賣をされたとのことである。植村氏の搖監時代は、かくも平凡で、寧ろ悲慘なものであったが、彼が遂に基督耶蘇を信じる様になり、彼れの全人格に一大變動を來たし、遂に靈界の先驅者となり得たのである。

人生は神秘である。昔天界に、古色蒼然たる城があつて、難多な樂器が、難然たる音を城内で發してゐたが、一人の天才的音樂家が之を發見して、その美音、寧ろ天界の神秘的な音樂を彼れの調節により、自己の人格に之を納め、調律した時に、最大最善の傑作が生まれ出でたと云ふことである。

次にヨハネが、耶蘇より與へられたものは、新らしき力である。耶蘇はヨハネの靈性に、靈のダイナモ―を投じた。無限の精力がヨハネの中に躍動し始めた。貴く強いエネルギーがヨハネの生命の中に波動し始めた此の力が野の人ヨハネに與へられた時に、彼れはガラリヤ湖畔の漁夫より、人を漁る靈界の指導者となり得たのである。かくして彼は最大なるものを耶蘇より與へられた。人心を支配し、宇宙を動かす靈の力を無限に與へられた、之れより貴き大切な器物は人生にない、ヨハネは耶蘇より之を獲得したのである。

大阪に廣瀬廣治と云ふ熱心な基督者がある。氏が人の怖れ忌み嫌ふ前科十三犯と云ふ兇賊を、平然として自己の店員に採用した。その店員は、前田と云ふ金庫破りの名人で、明治三十七年、某村役場の金庫を開け何萬圓かの大金を盗んで、十二犯として入獄した男である。彼の故

信じた時に、耶蘇を通して、ヨハネに波動を及ぼした、神を發見した時に、自己と、自己を圍繞する全世界が一大變化を起した。周圍の世界は全く變つた。

更にヨハネは、耶蘇に接した時に、人生の目的を見出した。今迄の彼は、自分の爲め、自己の名譽満足の爲めに生きるのが、人生の目的であると思ふてゐた。そこに野心のむら／＼と擡頭するを禁じ得なかつた。

處が彼が耶蘇に依りし時に、人生の目的は、自己を犠牲として、隣人の爲めに生くることであつた。即ち隣人社會國家人類の爲めに、更に耶蘇の爲めに己を獻げて奉仕する處に、人生の最大目的のあることに氣が付いた。かく靈覺した時に、彼の心底、愛の泉の瀑鳴を感じた、凝つとしてをれぬ、動かなければならぬ。奉仕せねばならぬ、働かなければならぬと云ふ衝物が、ヨハネの全心全靈を支配するのであつた。

こは大正二年寒氣凜烈な一月の頃であつた。

前田が出獄して後、有馬氏などのすゝめで、店員に採用し、先づ家族一同には、決して此の人を罪人呼ばりしてならぬことを命じ、其の翌日直ちに金二千圓を前田に持たして取引銀行に入金にやつた、すると前田は無事に歸つてきて涙を流しながら、「旦那様、なんぼ盗人でも、託せられた金を持ち逃げするのは、餘り樂すぎて、少し骨の折れた金庫でも、開けて盗つた金のやうな氣持がしません。全く妙な事になりました。之れは神様の御保護があるからだ」と心から思ひます、誠に有難い事であります」。かくして彼は神に熱禱をさゝぐる様になつた。

耶蘇と弟子ヨハネ、廣瀬氏と前田、ヨハネが耶蘇にふれた時、惡きものが取り去られ、貴きものが引き出され、更に新らしき靈の力が與へられた。廣瀬氏に觸れた前田、同じ道程をたどつてゐる。耶蘇は今尙信じて弟

郷は、京都近くの山崎で、六歳の時父に死別し、母は無茶な女で、頑是なき六歳の我が子に、食物も與へず捨て置いたので、前田は近所の家に忍び入り、お櫃の御飯を盗んだのがそもゝの原因である、かくして長じて大犯人と化したのである。廣瀬氏は、神戸刑務所に彼を訪ね、舊約聖書のエゼキール書第三十三章の第十一節を讀んだ「主エホバ言ひ給ふ、我は活く、我れ惡人の死ぬるを憐れず、惡人の其途を離れて生くるを悦ぶなり……惡をなさずして生命の律法にあゆみなば、必ず生ん死なざるべし」と。かくして廣瀬氏は、「前田君、人は惡を離れたら其の時より義人です、ノンビリした氣分になつて靈の天職を勤めなさい、法律も君の靈を入獄さすことは出来ないから……」と言ふと、首を垂れて熟と聽いてゐた前田は、双眼に溢るゝ許りの涙をたゝえて、「ありがたう御座います、心を改めますと樂になりました、これから此處で面白く暮らします」。

イエスをながし給ふ。

(ヨハネ傳、十一ノ三十五)

子となる人に、力を與へ恵みを與へ給ふ生ける神であり救主である。
否罪ある人の爲めに、屠られて祭壇に捧げらるゝ神の羔羊である。か
くして神と罪ある人との關係がやはらげられて、神の靈、人の靈をいか
し、新たにし給ふのである。

世界の中最も美しいもの

英國の田舎の小學校で、教師が或る日を定めて、その組の生徒に課題を與へた。それは世界に於て最も美しいと思ふものを持參してくることであつた。やがてその日が到着した。イの一番に得意顔で先生の前に進んできたのは級中での富める家庭の子供である。彼は光輝まばゆく價高き寶石をもつてきて、先生の前の机に置き、賞品を豫期して、自分の席に着した。居並ぶ同級生も同感の念もて期待してゐた。けれど先生は少しも賞賛しなかつた。次ぎに來たのは茶褐色の紙で包んだ可なり大きなものを持つて、同じ机の上に置き上紙をはぐと、銀色の紙があらはれた、此の紙を取り去ると、美麗な花模様で飾られた洋菓子が出できた。一同はアツト叫ぶ程、美しくもあり又甘味さうにも見え

傍に苦しんでゐる有様を暫らく見てゐた生徒(鳩)を助けた子供(が、大きな涙をポタリ／＼と流がすのである。先生は直ちに聲を上げて、世界に於て最も美しきものは此の涙であると純真な心情より流れる涙、げに世界に於ける最も美しきものである。「イエス涙をながし給ふ、人類史上最麗最美なものである。イエスが最も愛し給ふたベタニヤ村のマルタ、マリヤの姉妹の弟ラザロが死んだのを聞き遅ればせながら、ベタニヤを訪ね、マリヤがいたく心を傷め泣きゐる様子を見て、イエス悲み「ラザロの屍を何處に置きしか」と尋ぬ。すると「主よ來りて見よ」と墓場をさゝれし時、悲みの極、イエス泣き給ふたのである。

耶蘇のヒューマニティー

人の子としての耶蘇は、吾等と少しの變りはなかつた。肉體もて生まれ、母性の愛にはぐ／＼まれ、餓ゑては食し、渴しては飲み、疲かれては休み、

た。生徒等の中には寶石よりも此の方がよいと思ふものが多かつた。すると一人遅れてきた小兒がある、「何故今朝君は遅刻したか」と先生がその生徒に尋ねると、彼れ答へて云ふのには「先生只今私が學校にくる途中に一羽の大きな鷺が、鳩を捕へて飛び上がり、高い樹の枝にとまつたものですから、私は聲のかざりに叫んで鷺を追ひやり、その鳩を助け、血の流がるゝ傷口を池の水で洗ひ、樹蔭の下にかくしてまゐりました、放課後にその鳩を家に持つて行つて、介抱してやらうと思ひます」と。すると先生は「君再び行つてその鳩を持つてきて、こゝにある寶石と洋菓子と共に此の机の上に置き給へ」と、沈黙が暫らく教室を支配した。鳩の小さい救主が、一羽の傷付いた鳩をもつてきて机の上に置いた。すると生徒等は、机の周圍に集つてきて、先生が此等三個のものゝどれに賞品を與へるであらうと先生の判斷を待つてゐるのである。鳩の

に流がれるのである、その場合には涙が言葉よりも偉大さを發揮する。涙は岩間より流がるゝ泉でもなく、機械の中に煮沸する熱湯でもなく、音響を發して流がるゝ河水でもなく、又數百尺の高さより降下する瀑の水でもない。物理的には、涙は小さい滴に過ぎないが、精神的には世界の水力で最も力強きものである。人の心を動かし、世界を動かすことが出来る。

淺草の玉姫小學校の生徒に、水本博^{ひろし}と云ふ生徒がある。父親が一日働いても、母は病氣であり、借錢の利子を引き去ると家族一同三度の食をも充分取ることが出来ない。博君は「一日一食」であることが解かつた。社會の同情は忽ち一身に集つた。十四歳になる少女が自發的に、貯金を引出して、金員を送くる。自殺せんとせし青年が、同情して泣く。數十の衣類と百八十八圓の見舞金が集つた。唯物史觀の經濟からすれ

働いては眠むるのである、悲しき時には泣き、怒る時には縄もて打ち、かくした耶蘇は飽くまで人間的であり人間味の濃厚な方であり給ふた。パウロはエペソ市の爲めに、ヨナはニネベの爲めに、豫言者エレミヤはエルサレムの爲めに泣いた。此等の都市は、人心さびれ、道德亂れ、その滅びの日の近きを見て、憐み悲み市民の爲めに泣いたのである。

耶蘇はエルサレムを愛し、その將來を思ふて盡くしたのであるが、エルサレムの市民は少しも彼の心情を理解し得なかつた此の状態を見又滅び行く彼等の影を見る時に、耶蘇は聲をたてゝ烟び泣きし給ふた。

郊外ベタニヤに於けるラザロの時には、音をも立てず黙々として涙を流がし給ふたのである。弱蟲の様な人間がよく泣くのは病的であり、ヒステリックであるが、意志の強い人が泣くのは、至情があふれ出でゝ涙となつて流がれ出づるのである。強き人の涙は、言葉が力なきとき

耶蘇は「悲みの人」と呼ばれた、家なくして弟妹は、彼の心を知らず、母マリヤさへも彼れの使命を悟り得なかつた。而して耶蘇は人生のあらゆる方面に眞劍に打ち當り給ふた、彼は浮調子な樂觀主義者になり得ない。物の眞相を極め、直道もて邁進されたのである。ソシアリズムの父であるサン・シモンが、「身體をもて戰ふことは子供のする事か、或は年取つてもなほ子供である者のする事で、眞の人間は、精神の力でのみ戰ふ」と、身體の強弱で士俵の上で、一瞬間の勝敗を決する角力の肉體は太る、されど主義の戰、信仰の戰、神國建設の戰は、永遠の戰である、そこに苦惱あり悲哀がある。滅ぶる靈を見るときに、憂と悲みに充たされざるを得ないと思ふ。米國の大統領アブラハム・リンカーンの顔は、骨格のみ高く、目の座つた落付きの中に悲哀を包んでゐる。

耶蘇は人情を知り、人生を解し、婚姻の座にも列り、社會生活に同情し、農

ば、かゝる貧者を出すのが、經濟組織の不完全からくる、此の社會を打破して、新社會を建設せねばならぬと云ふのであるが、これと同時に、社會共存の美しき情緒が、「愛の贈物」の中に精神化して現はれる。美しくも貴きものは、ダイヤの光でなく、透明な涙の滴に寫る神々しき人の情けである。烟れる葦を消すことなき優さしき心根であるまいか、社會はかくして、經濟組織の缺點を更生せしめて動いて行く精神力があり、靈の力がある。耶蘇涙を流がし給へり、社會生活てふ沙漠の中に、潤うるほひを與へながら、溫かき涙の靈泉が、小川を作りつゝ流がれて行く、その岸邊に草が生え花が咲き、樹木が林立して、疲かれた旅人をいこはしむ。桃李物言はず其の下自ら逕けいをなすとは那邊の消息を傳へたものであるまいか。

悲哀の人

聲をあげて泣き而して「我はヨセフなり、我が父はなほ生ながらへをるや」と、無量の感抑ゆる能はずして聲を放つて泣いた。真情のほとばしりである。

オリブの山より、カルバリー山までの道程をヴァイア、ドロサ(悲哀の道)と呼ぶのである、十字架を負ふて、カルバリー山まで行く耶蘇は、悲哀の敷石を一つ宛歩み進むのであつた。世界大戦の時「ベルジウム國に處女なし」とまでに同國の女性は、獨兵の爲めに蹂躪されてしまつた。然し彼等國人は云ふ「歐土を救はん爲め人道の爲めにかく苦む」と、そこに民族的な犠牲があつたのである。耶蘇が人類の救の爲めに十字架上に倒れ給ふたのは更に貴く更に深い人生の秘義が含まれて居つたのである。彼れは人に先んじて苦み悲み悩み死んだのだ、かくして肉體的に心的に靈的に悩む吾人の救を全ふし給ふのである。西洋の鷺が

ナイチンゲール

民漁夫と語り寢ね「罪ある人」と共に食した人である。其の耶蘇が人間の弱さと悲哀と悩みと煩悶に心を傾注しては、心の奥から泣き給ふた。彼は「武士は食はずも」主義の武士でもなければ、喜怒哀樂を度外視した、ギリシヤのストア派の哲人でもなかつた。彼の心情には濃厚な人間味が流がれてゐる、最も強き男性が優しき柔き情緒の中に根ざしてゐる。

兄弟の爲めに、エジプトに賣られたヨセフ、遂に成功して大宰相となり、饑饉のあることを豫期して、準備してゐたのである。彼れが故國ユダヤは、その饑饉の見舞ふ處となり、兄弟等は隣國エジプトに食を求め救助を願ひにきたのであるが、澤山のエジプト人のゐた間にあつて、ヨセフは、宰相たる威儀を崩さず儼然として、兄弟等に應接した。されどエジプト人を全部別室に引かしめ、獨りにて兄弟等を招きたる時、ヨセフ

く、紅を差したのである。此の瞬間同姉の心は確かに靈に觸れて神を知るの端緒となつた」と。かくして彼の女は救はれて基督者となつた、泣く母と涙を流がす耶蘇、永遠の問題を外にしては解決の出来ない問題である。

耶蘇が地上に於て、流がせし涙は、彼は今尙靈界に於て、我等の爲めに流がし給ふシンボルである。近代の哲人ロイスが「耶蘇の永遠は、彼の體驗の完成である」と云ふてゐるが、涙を流がし給ふた耶蘇は、永遠の問題を地上に完成して表現したのである。ニユー・ヘブライズなる食人島に、傳道の大使命を果たしたペイトンが、多年苦心傳道しても信者になる人が少ない、杖とも柱とも頼んだ愛妻が死んだ時、葬むべく自ら彼の女の爲めに穴を掘つたのである。その時彼は「若しキリストなかりせば、予は狂人となりて墓邊に悶死したであらう」と。耶蘇の十字架の苦

鳴く時に梅の針の處に、胸を置いて鳴く、その聲が人の靈心を貫く美妙な音と化すると云ふ。十字架上の死、靈心を貫く樂音が響くのである。

涙の福音

母の涙は子を生かし、秋霜の如き嚴父の言葉よりも、無言のまゝなる老母の頬を傳へて流るゝ涙は、放蕩兒、不良少年少女を更生せしむる力がある。耶蘇の涙は罪ある人を活かして救ふ。木岡君の著作の一節に「死兒に旭光」と云ふのがある、それに依ると心痛と悲哀と失望とに窺れ果てた一婦人が、濕つばい冷や／＼した朝の空氣に包まれて、屠所に赴く羊の如く、今しも市ヶ谷見附を下つて來る。こは大森春野子であつて、姉の愛兒が病院で死なれ今や死兒を懷にして、我家へ歸らるゝ途中であつた。其の時、耶蘇涙を流がし給ふてか、東天から活きたキラ／＼と旭く朝光が、冷たい死兒の顔に輝て、愛兒の頬はさながら活けるが如

凡ての聖徒とともに、キリストの愛の廣さ

長さ高さ深さの如何許なるかを悟り。
(エペソ書、三ノ十八)

みと比する時に、吾等の悲みも苦みも軽いのである。耶蘇の涙は弱き人を強め、死せんとする人を生かし、退かんとする人を進ましむるのである。豚の如く、安心して太るよりも、悲哀の人となりて、神の如く聖ならんことを祈る。疑中悟ありと云ふが、涙滴の中に福音がある。悲哀は悲哀を呼び、涙は涙を追ふ人は耶蘇と共に久遠に生く。苦痛多き人生、滅びなんとする其の生命、されど耶蘇は「凋ぼませはせじ其の花を、落つる涙の雨をもて」と宣ふ。イエス涙を流がし給ふ。完全への表現であり、世界に於て最も美はしきものであるまいか。

愛の立體的宗教

愛は多くの場合に於て、平面的に理解さるゝ場合が多い。現代に於て最もよく高調さるゝ人類愛の如き、世界全人類を愛し、又これが爲めに大なる使命を有すと云ふてゐる。今日の社會問題の多くは、隣人に對する愛である。更に戀愛の如き、異性に對する愛もある。「愛は凡てのものを奪ふ」と云ふ現代思想の理解よりせば、愛は社會的な人類的なものより個人的なものにまで化して行くのである。而して我が愛するもの以外のものは凡て排斥し之れを敵として戰ふまでに極限されたものになる。耶蘇が「汝の敵を愛せ」と呼んだ深大な哲理よりせば、尤で反對な自己中心、愛する異性中心なものになる。かくの如く愛は、人類的にも社會的にも個人的にも、平面なものになる。基督教の思想より

でも、アフリカの土人でも、神を信ずるものは、一人残らず救はれるのである。これはことに現代に於てことに高唱さるべき處のものである。

神の心には、人間が作つた階級の別もなく、民族の別もなく、又優劣貧富の差もないのである。要は心靈の問題であり、信仰の問題である。茲にある一ツの條件は、信仰があるか、信仰がないかである。信仰さへあれば、神の愛は平等に注がれ分布されつゝあることがわかる。その愛は人間の差別的なものとは違ふ。その愛は自由であり平等である。

神の愛は十五億萬の世界の人々に區別なく分かたるゝのである。人間の愛は、差別的であるが、耶蘇の愛は抱擁的である。此の思想は、神は父であり、人類は彼の子であると云ふ處からこねばならぬ

人間界には、ブルジョワ階級と、プロレタリア階級とあり、資本家と勞働者、支配するものとさるゝものとあるが、神は此のマンメーキングなも

せば、甚だ心もとないものである。勿論基督教にも此の一面はある、されど更に高きもの深きものがある。立體的愛とはその消息を語るもの、而して平面的なものに更に立體的なものを加へて行くのである。

現代思想に對する基督教の使命又こゝに存してゐると云ふことが出来る。吾等は今凡ての基督者と共に、耶蘇の愛の廣さ、長さ、高さ、深さの如何許なるかを悟り度いと思ふ。此の四ツの角度をイエスの中に發見し之を説明したのが、ヨハネ福音書(三章十六節以下)である。以下此の福音書の數節を中心として、愛の廣さ、長さ、高さ、深さを明かに見度いと思ふ。

愛の廣さ

「すべて彼を信ずる者は亡びず、イエスを信ずるあらゆる人々、富めるも貧しきも、地位ある人もなき人も、男も女も、日本人も米國人も、アイヌ族

愛の長さ

「永遠の生命を得んためなり、神を信じ耶蘇を信ずるものは、救はれて永遠に續く生命を得る。此の久遠の生命の獲得、そこに愛の長さがある。無限大の長さである。亡びないで救はれたるものゝ生命は永へに連續するのである。罪は亡びを意味し、そこに死があり終りがあるが、救はれた心霊には、久遠の生命を握る、そこに所有があり獲得がある。人類のあるかぎり、人生の續く限り、そこには愛が續き永存するのである。愛の長さは時間を超越し、人間が地上に、生活する限り續くのである。山盡くれば水がある。神愛のある處には行詰るが如きことはないのである。人間界には山も盡き水も盡くる時がある、されど信ずるものからすれば永遠はそこから始まる。

パウロは、エペソ書(三ノ十五、十六)に於て「御靈によりて力をもて汝らの

のを打破して、神々しき神子の人格を發揚せんとし給ふ。かくて世は永遠に神玄なる光に包まるゝのである。

現代は民族主義、國家至上主義、自己の國家のみを偉いとして愛する、所謂狹小なる愛國者の數多き時代であるが、耶蘇は此の思想を擴大し延長して、人類大のものとなし給ふ、その人類の中に國家あり社會あり、個人があるのである。國家あつて個人あると云ふ思想を、神あつて人類あり個人あるてふ思想に擴大し給ふた。

人種的差別を主張して、人種の優劣を云々するが如きは、天に唾する反逆であるまいか、神はかゝる人間の罪を惡くみ給ふ。神より出發する時には、黒も白も、赤も黄も皆神子である。こゝに現代に對する神の挑戦があり、時代思想に對する使命がある。すべて信ずるものは亡びず、人類としてはそこに希望あり感謝がある。

人の子の他には、天に昇りしものなし(ヨハネ傳、三ノ十三後半)。地上にありし耶蘇が、天父の御翼の下に歸つた。そこに空間的の高さである。今日まで支那思想の感化を受けた日本の愛なる思想は、天子が庶民を愛し、親が子を愛すと云ふ意義であつた。高貴なるものが低きものを愛し大なるものが小なるものを愛すと云ふ思想のみであつた。處が基督教に於ては子が親を愛し、民が天子を愛すと云ふ意義を主張する様になつた。在來の思想からすれば民が天子を愛すると云ふことは不敬の如く思はれたのであるが、眞の忠臣は天子を愛する處まで行かねば徹底し得ないとは、耶蘇に依りて始めて明かになつたことである。氣象學では、天空高くなるに従つて空氣が稀薄であるとなしてゐるが、心靈界信仰の世界に於ては、不完全なるものが完全なる神を慕ひ、未完成が完成を愛する處に、地上の愛が天上に向つて反射作用を起こすの

内なる人を強くし、信仰によりて、キリストを汝らの心に住はせ汝らをして愛に根ざし、愛を基として生かしめんと、永遠の生命とは、耶蘇を信じた瞬間、人の心靈に耶蘇が内在し、人の心靈を強め、力を與へ、あらゆる困難病苦悲哀に打勝たしむるのである。即ち現在に於て、久遠の生命を獲得するのである。而して神の愛を知り得る力を我れに與へ給ふ。人はかくして内面的體驗に依り、神の内在的實在を自覺し得るのである。そこに久遠に至る生命を人は發見する。喜悅と使命の感に満たされざるを得ない。愛を渴望する靈の活動は常に神聖である、そこに尊き靈光の發現がある。ヨハネが「永遠の生命を得んが爲めなり」と叫んだのも自己の内面的體驗より知り得た尊き得物である。人はかくして永遠に生きるのだ。

愛の高さ

蘇を愛すべきか、我が子を愛すべきかの岐路に立つたのである。神に對するの愛と人に對するの愛と孰れが貴く孰れが強きか、女は弱し母は強しとまでに母性愛は強いのであるが、熾烈なる信仰に燃ゆる婦人は、その時「耶蘇を愛し十字架を愛す」と絶叫したのである。かくて愛兒は眼前に血祭にされてしまふた。神を信じない人からすれば、我が子を助け、我が兒の爲めに自己の生命を犠牲にするのが常道であるが、信仰生活に於ては、これと反對に「我が子」よりも耶蘇、自己よりも神を愛する處に生命があるのである。かくまで信仰は眞劍であるべきである。「我よりも父母を愛するものは我にかなはぬものなり」と、耶蘇が言明し給ふたのもこの意義である。古來より幾百幾千の殉教者は、皆此の尊貴なる信仰に依りて自己も救へ人も潔め社會國家をも「神へ」と歸らしめたのである。近世史の著者シカゴ大學教授のスウエル博士が、和

である。そこに高きを愛し高きを拜する心情の宗教がある。自分に取つて、最高の實在は愛である、神の人格を慕ひ之を愛するにある。此の愛を神に於て完成する處、そこに人格の宗教が生まれてくる。感應と應化、罪ある我れが救はれて行く一道の光明が輝く。「全人、全靈、全熱愛を捧げて、婦依三昧の誠を打ち込む、天地の實在者を得ずんば、どうしても満足することの出来ぬ要求がある」と、綱島梁川が云ふたのも、同じ追及の努力である。

世界大戦の時、トルコ軍がアルメニヤ人を逆殺したのであるが、その時トルコ兵が、一人のアルメニヤの婦人で五歳の男の子をもてるものを捕まへて、「汝若し耶蘇に對する信仰を棄てるならば、汝等親子を許して生歸させるが、然らずんば、汝の面前に於て、汝の愛兒を殺害するが、汝はその孰れを撰ぶや」と詰問された時に、信仰篤きアルメニヤの婦人は、耶

罪ある世、罪ある人の子を救はんとして、イエスが人となり給ふたのである。空間的に天は高く、地は低しと見ると、天は高さであり、地は深さである、更に精神的靈的に見ると、人の心は無限に深い、罪は人間の限らない生命の深さまで、浸み込んでその生命の根を枯らさんとする、そこに滅落があり亡びがあるのだ。而して人生は人間苦のせつなきに泣く。その悲みの深さは底の知れないまでに深い。神は此の深い人の心靈の海に、はいり込んで、手をのばして罪の深みより人を救ひ出さんと努力し給ふ。イエスの努力は即ちそれを物語るものであるまいか。罪は深い。されど神の愛は更に深い。愛の深さは「自己を與ふ」ことである。自己を犠牲として他を生かさんとするのである。米國のニュー・ヨーク市にあつたことであるが、三歳になる愛兒が、大病になつて、それを助けるには、どうしても父なる人の血液を注射せねばならな

蘭共和國を叙する一節に、「殉教者の流せる血の一滴ほど貴き種子はな
い」と云ふてゐるが、殉教者の血が、人の心の畑に蒔きつけられて、やがて
生長發達して、世界を創造して行くのである。かくして基督教は、傳へ
られ擴大されて今日に至つた。「殉教者は世界を創造す、それは人間が神
を愛する表現である。愛の高さは、神の愛の深さに比例する。神の愛
は十字架上に於てその深さを表はし給ふた、罪の深さを探り、罪より人
を救ひ給ふた。此の愛に反應する罪ある人間の愛が、殉教の死となつ
て、神に答へたのである。

愛の深さ

それ神はその獨子を賜ふほどに世を愛し給へり(ヨハネ三章十六節の
前節)。ロゴスが肉體となつたと云ふ信仰、即ち神が人となつたと云ふ
思想は、神の愛の深さを語るものである。獨子を給ふ程に世を愛した。

ある。その愛は海よりも深く心霊の罪の深さを貫き救ひ深めずんば止まない。その力はいかなる犠牲を拂つても、驀地に進むのである。「劔太刀もろ刃の利きに足ふみて、死にも死になむ君によりては」と、かくして、獅子奮迅の勢は一直線の軌道をたどる。そこに十字架の死があるのである。人を罪より救はんとする熱愛には死があり犠牲を伴ふのである、此の犠牲此の十字架上の死なしには人は罪より救はれないのである。科學者なるニュートンが運動の法則にも、外力の作用なくも、運動せる物體は永久に靜止せぬとあるが、外界より干涉せられずに、内面より涌出するが如く、宇宙の核心より、愛の至情は發せられて靜止しないのである。批評家ブラッドレーが、露西亞の作家ツルゲネーフの内より引用した物語に、或る獵師が獵犬をつれて、樹の下を通ると、一羽の親雀が雛の爲めに、餌をさがしてゐる。處がこの獵犬が、巢雛を殺

かつた。そこで醫師がそのことを父なる人に話すと、彼は喜んで、愛兒の爲めに血液を與へたのである。腕を切つてその血を取り、それを注射した。すると二三日經て、愛兒の生命が快復して遂に全快したと云ふことである。愛兒を生かさん爲め救はん爲めに、自己の危険を忘れて「與へん」とする態度と心根、そこに愛の深さがある。オーガスチンが放蕩生活を送り學業に勵まずに日増惡化し行く有様を見て、母モニカは身心を捧げて彼を救はんとしたのである。オーガスチンの行く處影の如く彼れを追ふたのである。而して母モニカは、神に熱禱を捧げ彼の救はれんことを神に願ふた。此の至聖の愛、オーガスチンの心靈の深みにまで浸透して、さしもの放蕩兒も遂に善導聖化されて聖者となり世界の信仰に一大異彩を放つに至つたのである。それ神はその獨子を賜ふほどに世を愛し給ふたとは此の深大の愛を説いたもので

御國の來らんことを、御意の天の如く、

地にも行はれん事を。

(マタイ傳、六ノ十)

さんと巢を見上ぐる刹那、いづこともなく、小石の如きものが落下して、その獵犬に打ち當つた、獵犬はこれに驚き逃げ去つたのであるが、此の小石の如く飛び來りしは母鳥であつた、全力をこめて獵犬に打ち當りし結果、血をはいて死んでしまふた。此の有様を見て、此の獵師は生き物を殺すことをやめた。地球の核心は鐵であるといふ學者が云ふが、宇宙の核心は愛であるといふイエスは主張したまふ。その宇宙の核心より、獨子が人間界に與へられたのである。

「凡ての聖徒と共に、キリストの愛の廣さ長さ高さ深さの如何許なるかを悟り」とパウロが云ふた眞意が、吾等の心靈を充たしながら、交響樂を奏して人生は進む。此の立體的愛の宗教を完成したのが耶蘇であり、之を完成せんとして戦ふのが、彼を信ずる基督者である。敗るゝも感謝、勝つゝも感謝である。

創造の祈禱

「御國の來らんことを、御意の天の如く、地にも行はれん事を」とは、主の祈の一節である。古き譯には「爾國を臨らせ給へ、爾旨の天に成る如く地にも成せ給へ」と云ふのであるが、改譯の方が原意に近いが、如何にも翻譯的で意義が徹底しないというらみがある。此の一節は古き方が親しみがあゝ、意味が明かであると思ふ。更に爾旨の天に成る如く地にもなさせ、一日も早く御國を地上に來らしめ給へと云ふ意である。耶蘇及び當時の基督者に取つては、此の御國を來らせ給へと云ふことは、末世的の意があつたと思ふ。されど今日は世が直ちに滅び、御國が來ると云ふことでなく、御國は暫時に創造されつゝ地上に實現さるべきものである。耶蘇はこゝに祈禱の模範を示し給ふた。神の御意が地上に

出されてくるのである。謠曲「羽衣」の中に、三保の松原にて漁夫白龍と天人との會篇があるが、天人が漁夫に向つて、「いや疑は人にあり、天に偽りなきものを」と宣明してゐる處があるが、その偽りなき天の生活を地上の生活に移植し給へと祈るのが、「御意の天のごとく、地にも行はれんことを」である。天上の生命が、地上の生命をうるほす時に、そこに創造せられたる生活が生まれてくるのである。

矛盾した二つの生活

わが欲する所の善は之をなさず、反つて欲せぬ所の惡は之をなすなり（ロマ書、七ノ十九）とはパウロの心の悩みであつた。好んで惡をなし罪を犯かすものはない、惡むいと知りいやだと思ひながら惡をなし、それに親しみ勝ちなのは人間の弱い處である。そこで「我らを嘗試に遇せず、惡より救ひ出したまへ」と祈らざるを得ないのである。人間の至情

行はるゝ時に、凡てのものが新らしくなる。こゝに祈禱は創造の力と化してくる。

「御國が来る」とは、正義が不義に勝ち、眞理が不正に勝ち、愛が残忍な心に勝ち、純潔が淫慾に勝ち、平和が戦争に勝つことである。基督教會は地上に友情と平和と美しく行はれ、人と人、國と國、神と人との協調が實現せられ、争なく憎惡なく、喜悅と感謝と希望に充つる、主の心と生活を中心とした世界の創造せられんことである。

「祈る」とは「いみる」で、國學者から云はしむれば心を清くし、精進潔齋して、神前に我が念ふことを宣ひ告ぐるのである。而して此の祈禱が純眞にして碎けたる生命の核心より發せらるゝ時、かくして其の祈が、神の心に觸るゝ刹那に、祈る人の生命に新らしき創造が始まり、家庭、社會、國家、人類の間に神と人の協力に依つて、創造された新しき世界が産み

せんか、神を喜ばせんかと云ふ時に、多くの人は人の氣に入らんことをなしてしまふ。こゝに矛盾の生活がある。使徒ペテロが、「人に従はんよりか神に従ふべきなり」使徒行傳、五ノ二十九と呼んだのも、ギリシヤの哲人ソクラテスが、毒藥へムロツクを飲まんとしにも「吾人は人に従はで、神に従ふべきなり」と云ふたのも、軌道をグット轉開して神に歸りイエスに還るべきことをペテロは主張してゐる。

富豪の愛娘が、流行の舞踏會で盛んに踊り舞ふてゐた。彼女の衣は粹なものづくし、その顔は美しく、ふむ足は蝶の羽毛の如く軽い、彼の女をして更に幸福にせしめたのは、社交界の花形とも云ふべき、當世の流行兒とエンゲージをなし、その結婚も旬日に迫つてゐるのである。處が舞踏の最中、彼女の足はシビれ、目はかすみ、體力は弱はり、桃色の肉體も、直ちに青色に變じてしまふた。花より花へと飛び廻つた處女に、死の

は、眞善美の生活を慕ひながら、不眞、不善、不美な生活を送くる。こゝに二つの矛盾したものがあつた。「噫われ惱める人なるかな此の死の肢體より我を救はん者は誰ぞ」と云ふ苦惱の叫びが生じてくるのである。

抽象的に罪惡と云へば、恐るべきもの、惡むべきものであるが、肉の衣もて被はるゝ時には人の心を引きつけねば止まぬものとなる。異性間に行はるゝ不純潔な生活も、理論からすれば、恐ろしきものであるが、實際の問題となると誘惑の源となる。ヘロデ王が、バプテスマのヨハネの頸を切らしたのも、妾のヘロデヤを喜ろこばさんが爲めであつた。

アンテバスが、ヤコブを殺し、ペテロを獄に投じたのもユダヤ人の氣に入らんが爲めであつた。佛國のチャールス九世が、セント・バーソロミーの大逆殺（舊教徒が新教徒を迫害せしこと）をやつたのも、母を喜ばせんが爲めであつたと云はれてゐる。人と神との間に立つて人を喜ば

情的に、唯「自分」のこのみを話なす時に、彼等と同じく狂人である」と。

「自己」「自己の享樂」「自己の利害」「自己の幸福」のみ談じ合ふ、現代の社會の男女は、知らずして、神經衰弱者であり、ヒステリー患者であるまいか、彼等は地上のみの生活、狂的な行詰りの生活のみを繰り返してゐる。かゝる地上に、御國の來らんことを祈る、人生轉開を求むる人の願望である。聖境に進むごとに、自己の清からざるを感じ、神の聖德の光に照らさるときに、身の汚れと穢れの數々が明かになる、そこに懺悔あり、そこに人性眞醇の祈禱がある。「祈らずも守るは、神の常なれど、願ふは民の誠なりけり」、人間至情の發露であらう。

生命の發電所へ

ヘルマン女史が、「創造的祈禱」の著に於て、「ボタンを押すと、創造的エネルギーに觸れる、神の電力を貯藏する發電所より流れ來るものに通じ、か

斷案が下された。彼女は死の世界の人となつた。踊りし舞は「死のダンス」であつた。祈禱のない處そこには創造がない、青春の美も、とこしなへに衰へて行く、御意の天の如く、地にも行はれんことを、あまりに人間化した地上、そこには天の御意が必要であるまいか、心あるものは悩み、心なきものは無心の状態で死んで行く。

北歐文豪のイブセンの創作「ベヤ・ギント」の中に、彼れが狂人になり、癡狂病院に入れられた時に、彼は入院してゐる人々が、狂人であることを知らなかつた。彼等は感情的に語り、鋭き聲もて論じ合ふてゐるのを見て、ベヤ・ギントが驚ろいて、醫師に尋ねると、醫師の云ふのには「彼等は君の云ふ如く、感情的に話してゐるが、その論ずる處話す處は全部「彼等自身」のことに關してゐる。終日終夜、彼等は「自己」のことに就いてのみ話してゐる、而してその「自己」より離ることが出来ない。されど吾等も感

路に依り、地上の人に注がれる。祈禱は生命の表現だと思ふ、生命が生命へと開く、言語の如何を問はない。只至聖至情の表現が大切である。更に祈禱は、泉より涌出した水が、又泉に歸る様なものだ。地上の靈、天界の靈へと向ふ、向上し精進し、新らしき人生の風光が見える、その神秘界に創造がある。

偉大なる説教家として推稱された英國のジョウエツト博士が、牧する教會の會員に、貧しき靴屋があつた。彼れの仕事場は湖水に面した一間四方位の狭苦るしい小さな室である。彼は此の小さな室で、忠實に靴の修繕をやつてゐる。ジョウエツト博士が、或る日彼を訪問して「君此の小さな室で勞働してゐると、時には氣が鬱してくる時があるだらうね」と言ひかけると、靴屋さんが言ふには「御説の通りです、然かしその時には此の小さな窓を開くのです、するとあの青藍な湖水、紺青の風致

くして豊富なる生命があふれて人を浸す」と。人が神に祈ることに依り、神の力、神の生命が、油のきれた機械の様に悲哀の音のみたてゝゐる人の生活を浸るはし滑かにし柔かにする。

詩人テニソンと、大宰相グラッドストンと、畫家ホルマン・ハントと批評家サイモンヂと四人で、祈禱の問題を語り合ふた時に、詩聖テニソンが、祈禱とは心靈と永遠の生命と通ずる水門を開く様なものだ」と云ふた有名な言葉があるが、祈禱とは己が靈を神に向つて開くことである。

神の愛は創造力を有し、その力は自己を空虚にして與へんとする愛である。「創世の卷」に地は定形なく、曠空くして黑暗淵の面にあり神の靈、水の面を覆へたりと。創造者の理想に背き黑暗なる罪の淵にさまよふ人生、そこに神の靈觸るれば、救はれた清き正しき人と化するのである。正であり、義であり、善であり、美である創造者の住む世界、愛てふ通

流れてくる。伊太利の文豪ダンテは、比較的高慢な詩才であつたが、彼れが地獄篇の第十一章を書く時に、彼の心靈は碎けた、此の章は「主の祈り」を意譯した様なものだ、それから彼れはこの主の祈に依つて高慢な態度より碎けた魂の詩人となつたと云ふことである。

ゴールドン將軍は祈禱の人であつた、彼が戰場に於て、ハンケチを天幕の入口に、吊るしある時には、彼はテントの中に祈つてゐる時であつた。宗教改革者ルーテルが「我若し一日に二三時間祈ることがなかつたら一日を貰いて活動が出来ないであらう」と。

米國の社會改造家で、レーモンド・ロビンズと云ふ人がある。大戰當時は、軍隊付の牧師として大に活動をした有名な人物であるが、彼はもと法律を大學で専攻した人で卒業後辯護士をしてゐたのであるが、アラスカに行くと金塊が到る處にあることを聞き辯護士を廢業して、アラ

が見えます、すると塵埃に埋もれてゐる私の心は、直ちに新鮮な心情に立歸り、廣く清き世界に遊ぶが如くなり、再び塵のある靴の底を叩きながら新英氣もて勞働致します」と、その時にジョウエット博士が膝を打つて、基督者が神に祈る秘義がこゝだと悟つたと云ふことである。言語の優劣に捕はるゝ祈禱は、迷信化する時があるが、生命が生命に叫ぶ至聖な時に、祈禱は人の靈を漸進的に創造し新にし力を與へて行くのである。

單純なるデヴォーション

祈禱は單にして純なデヴォートされた我れの態度である。私心があり私慾があり、私の計畫よりなさるべきものではない。宇宙の靈に對し絶對の服従でなければならぬ。天父に對する靈の開城であり、降服を意味する。水は低き方に向つて流れる、神の靈は謙遜な靈に向つて

みに堪えないので、心を慰めんが爲めに歐洲に旅行をした。たま／＼アルプスを越え様とすると吹雪に會ふて丁度君と同じ様に修道院に救助され天に歸りし妻子とも他日會することを教へられ、それより發心して巴里の神學院で八年間研究し、自分と同じ境遇の人々を助け度い目的で數年前此のアラスカに來たのである。君もバイブルを讀み、神を信じて、不安な人生に安きを得よ」と訓戒を温情もて、ロビンスに説くのである。ロビンスは、口には感謝したが心の中ではバイブルは金儲けの書物であり、牧師は勞働時間の割合には給料の多いものだ位に受け取つたのである。健康快復したロビンスは、親切を謝して、目的達成の爲めにと再度山奥へと進んで行つた。鹽の様な細かな雪が、しとしと降つてくる、ロビンスが山奥に一人立つて周圍を見渡した、その時に沈黙ほど恐ろしいものはないと感じ、山林には蟲の聲もなく、鳥も

スカに金掘りに赴いた。彼は一攫千金、目的の爲めには手段を撰ばない心もてアラスカに行つた。一疋の驢馬にシヤボロとジツクの袋を乗せてユーコン州より、深山へと奥深く行つたのである。時は冬であつた、天候闇黒となり、直ちに吹風と化し、飛雪前途を被ふて、彼は一進一退も出来なくなり、遂に昏惑して倒れてしまふた。白雪がおしげもなく倒れた彼れの體を被ふのである。アラスカの山奥、そこにかゝる人を救助せんが爲めに一つの修道院があつた。一疋の犬が毎日毎夜雪倒れの人をさがし廻つてゐる、ふとして此の犬がレーモンド・ロピンスの體を見出した。彼れが目醒めて見ると立派な修道院の一室に安かに親切に世話になりつゝあることを知つた。もう凍傷もよくなりかゝると、修道僧が彼れに傳道を始め自分の身上話を始めた。「自分も米國の生れで辯護士であつたが十數年前妻子に死別して、寂しさと悲し

祈禱は、人を新に創造し、彼れの生活する世界を變化する。「御國の來らんことを、御意の天の如く、地にも行はれんことを」、人の祈禱に依り、神は今尙創造の大業を完成しつゝある、吾等は主にありて生き動きあることを得るのである。吾等は此の創造の力ある祈禱に生命の一波をのせて、渾浩流轉する天地の大波に同じ度い、神ははかなき生活に泣く人の子に、救ふべきくしき力を與へ給ふ、貴きかな祈禱と創造。

鳴かない生きてるものはなく、萬物皆死せりと思ふた。神も死んだ自分も死しつゝあると心の奥で叫んだ。失望と落膽の重い氣心もて、數歩前進すると、雨晒らしになつた十字架が、白雪に被はれて何んとも云ふことの出来ない貴き風貌もて、彼の前に立つてゐる。その尊嚴な氣に打たれて、彼は十字架の前にひれ俯して熱禱を捧げた。その瞬間その十字架の後方に光を認め、孤獨で萬象死せりと思ふた彼の心靈が熱し、勇氣と力と希望が全心全靈に、あふるゝばかりにみなぎつてきた。

その十字架は、金を掘りに行つた工夫の墓標であつたのだ。ロビンスの靈は覺醒した、金塊を探しに行つて十字架を發見した、金塊の獲得でなく犠牲の宗教を握ぎつて下山した。その後彼は一生涯、神と人に捧ぐる決心をして今や世界的に傳道をしてゐる。「人生五十年、迷ふより五分間神の前に祈れ」とは彼の信仰の體驗である。生命より涌出する

我に居れ、
さらば我なんぢらに居らん。

(ヨハネ傳、十五ノ四)

耶蘇の四大文字

世界大戰數年前のことであるが、當時歐洲を支配してゐた五人の偉大なる人物があつた。英國のエドワード王、獨逸のカイザー、奧國のフーデナンド大公、露國の外務大臣、イヅヴォルスキ、羅馬法王廳のメリー、デルヴァールであつた。當時の歐土は、實に彼等の勢力に依りて、如何様にも動かすことが出來たのである。されど大戰直後は、歐洲の天地は震動し、一大變化をもたらした。即ち大戰直後の歐洲は、四人の非凡なる人々に依りて、牛耳られたのである。そは英のロイド・ジョージ、米のウィルソン、佛のクレマンソー、伊のオルランドの諸士である。此等四人の協力と努力に依つて、破壊されて、死滅せんとする歐洲を改造し、新たに創造さるゝ基礎と精神が置かれたのである。

出づる靈の生命を受くるまでは如何なることがあらうと彼れを離れない強い決心と覺悟が必要である。人工に依りて、設けらるゝ東村山の貯水池も月餘の旱天が續くと、東京二百五十萬の生命が、渴水の驚怖を感ぜざるを得ない。雨が降ると云ふことは人工以上科學以上だ。

重荷を負へるものは、我に來れ、我れ汝等を休ません。人生の苦勞、悲哀、肉體的に、精神的に夜も晝も働きつかれ切つてゐる人々、とくに現代の様な文明病とも云ふべき神經衰弱的な人々に對し、來りて休めと耶蘇は近づき給ふのである。心の苦しい時に、心配に満ちてゐる時に、親しき人に胸を打ち開けた丈でさへも心が慰められ、氣分が軽くなることを體驗してゐるのであるが、されど肉身の人にも打開けられぬ心の重さに苦むことがある。その時に、吾等は耶蘇に打ち開けるのである。耶蘇は弱い我等の負ひ切れないと思ふ心の重荷を分けて、自ら吾等の

歐洲戰前は五人の人物が歐洲を、戦後は四人の偉人が世界を動かせし如く、耶蘇が吾等弱き人間に對し、時には罪の爲めに枯死せんとする場合、人生航路の羅針盤として吾等に示し給ふた四ツの大なる文字がある、而してそれは吾人の概念に訴へたものでなく、意志に訴へたものである。此等は、來れ、從へ、居れ、行け、と云ふ四大文字である。人生を支配し得る靈力が、此の四ツの文字の内に含まれてゐる。

來　　れ

誰れにても渴くものあらば、我れに來れ、而して飲めとは耶蘇の御言葉である。吾等の靈的生命が、乾いた地の如く、草木が枯れ、花も萎み果も落ちる時の様に、萎縮して枯渴せんとせし時に之に潤を與へ新生氣を與ふるものは耶蘇である。彼は靈的源泉である。靈渴を感ずる時に、吾等の意志を彼れに向つて結びつけなければならぬ。彼れより流れ

云ふのがある。作中のヘツターと云ふ女が不義な子を産んで、殺した結果、投獄された。その獄舎をダイナ、モリスが訪問すると、ヘツターは泣いて恰も子供の如く、ダイナの胸によりて、「ダイナよ今晚寂しく私をこゝに獨り残こしてくれるな」と泣き訴へると、ダイナは、「否ヘツターよ、我れでなく、外に」或る人「が汝と共に、夜も晝も、汝の傍近くゐるのである」と慰めた、その「或る人」は、吾等を獨り残こさずに、常に近く寄り、吾等と共に泣き苦み悲み、吾等の重荷を負ひ給ふのである。

來りて靈の糧を食せよと云へ給ふ耶蘇その人が、我等の糧、力、救である。

從

へ

耶蘇がガリラヤ湖畔に於て、始めて彼れの福音の偉業を開始し給ふたとき、「我れに従へ」と命じ給ふた。十二弟子の中心人物が、凡てを棄てゝ彼に従ふた。漁夫である彼等には舟及び漁具は、その生活を保證した

重荷を負ふて下さるのである。

更に耶蘇は、來りて食せよと招ぎ給ふ。ガリラヤ湖畔に於て、春まだ寒き風が吹く、早朝に、十字架に死せし耶蘇を見て、失望して再び彼等の故郷に歸り、漁夫となり了^おへた弟子ペテロとトマス、ナタナエルとゼベタイの子等が、ペテロのすゝめで漁獵の爲めに海に行つたが何等の獲物がなかつた。イエスは、舟の右のかたに網をおろせ、さらば獲物あらんと、かくして彼等は多くの獲物を得た。イエスの愛せし弟子ヨハネが、ペテロに「主なり」と叫んだ。すると復活せし耶蘇は、彼等を、來りて食せよ」と招ぎ給ふた。耶蘇を棄てゝ去つた彼等を譴責せずに、溫かき言葉をもて、招ぎ給ふた。彼を棄てた人を更に追及して招ぐ、そこに耶蘇の神々しき愛に充ちた人格がある。

英國の閨秀作家、ジョウジ、エリオットの傑作の一つに、「アダム・ビード」と

居　　れ

汝等我に居れ、さらば我なんぢらに居らんとは、耶蘇がエルサレムの二階座敷に於て、弟子等に分かれなんとせし時に云ひ給ふた言葉である。我は葡萄の樹、汝等はその枝である。汝等が葡萄の幹である我れに居るならば如何なる場合に於ても枯れることはない、必ず葉を生じ花が咲き果を結ぶことが出来るのである。人類は耶蘇を離れて、果を結ぶことは出来ない。微細な塵でも、若し電線の中にあり電流を妨たげるならば、照明は暗く、室は直ちに暗黒に化してしまふ。即ち電力が中絶してしまふのである。いと小さな罪惡でも、人間の靈性と神の靈性との間にあるならば、人間の生命には靈力が通じなくなる。即ち人格の室が暗くなつてしまふ。「汝等我に居れ」とは、その道を開き、耶蘇の靈と、我が靈と葡萄の樹と枝の如く連なり、且つ接觸してゐる時に人間生

ものである。彼等は此の生活の保證を棄て、大膽にも耶蘇に従ふた。そこに第一王國創始の發端がある。

富める青年が、耶蘇に來り、永世の問題に就き教を受けんとした時に、耶蘇はその青年に向ひ、「汝の財産を賣却し、そを貧しきものに施こし、而して後に「我に従へ」と言明したが富める青年は、躊躇して従はざりし爲め彼は救に入り得なかつた。

耶蘇は又「我に従はんとするものは、十字架を取りて我に従へ」と、耶蘇に依つて、人生問題の凡てを解決せんとせば十字架の苦も死も辭せずして従はねば救はれないのである。死ぬる決心で従ふべきだ。十字架なしには救はれない。シエルドン博士の名著「みあしの跡」の内に、「耶蘇は何を欲し給ふか」との間があるが、彼れは我等が凡てを棄て十字架を取りて従はんことを欲し給ふ。

る。

米國^{ロスアンゼルス}羅府市のホルトン博士が、野外教會を新築せし時、どうしても四萬圓の金が不足である。彼は確信をもて神に祈つた。彼が心の中に某氏のことを思ふて寄附を願ふべく汽車に乗つた。車中で彼はしきりに祈つた。すると見ず知らずの車中の紳士が、ホルトン博士の肩をたたくので、見上ぐるとその紳士が云ふのには予は何にか君になすべき義務がある様に感ずると話されたので、ホルトン博士は、教會建築に際し、八割位はやつたけれど、四萬圓不足の爲め完成し兼ねてゐることを話なし來るクリスマス(一ヶ月以内)までには是非完成し度いと熱情もて訴へた。するとその紳士は、それなれば予は君に四萬圓の小切手と與へませうとて四萬圓の手形を書いてホルトン博士に與へた。流石のホルトン博士も、半信半疑で受け取り、ロスアンゼルス市に歸り、銀行に

活は、物質的にも精神的にも、行詰ると云ふことは絶對にないのである。基督教は、シナイ山に於ける宗教律でもなく又倫理道德の法則でもない。それは福音である。久遠の法悦、消えざる歡喜の中に耶蘇と共にあることである。

吾人が神に祈ると云ふことも、換言すれば神に居ることである。魚は鰭がありて水中を浴ぎ、鳥は翼ありて空中を飛ぶ如く、人間は祈禱てふ靈能の躍動を通して、宇宙の靈に達し、靈と眞に居ます神に觸れ感じそこに生くるのである。嘗つてハーヴァード大學の名譽總長たるエリオット博士が、「祈禱とは智慧の超越せる努力である」と云ふたが至言であるまいか。科學者であり神學者であつたジョン・フイスク博士がその著「自然より神へ」に於て、自然を理解することが、神を知る近道であることを力説されたが、予は更に「人の靈より神の靈へ」と云ひ度いのであ

るべきではない、停止することは、實の持ち腐れであり、折角獲得せし力も、之を外部に流がすのでなければ、却つて腐されてしまふ憂がある。故に耶蘇は、「行け」と最後に命じ給ふ。己れの家庭の信ぜざる群の中に、友の中に、會社の中に、工場の中に、社會同胞の中に、失はれし羊を見出し、所有主なる神の懷まで彼等を持ち返すまでは、追及してその靈を漁れ、印度に起りし佛教が、支那、朝鮮を経て、日本に渡來せしも、日本は之を米國に傳へざりし爲め、佛教はその活氣を失ふてしまふた。基督教は、ユダヤに起こり、歐洲に入り米國に渡り、日本を経て支那、印度に至り今やユダヤ本國に歸還せんとしてゐる。世界人類を貫き、今や耶蘇の生命は、渦をまゐて流れてゐる。

來り、從へ、居り、行け、此等四大文字の中に、耶蘇の使命の全班が伺はるゝ。動にして靜、靜にして動、そこに汲めども汲めどもつきざる靈味のある

行つて支拂の手續をすると驚いたことには現金四萬圓渡されたのである。かくして二百萬圓以上の教會が完成された耶蘇と共に「居る人」のなすことは、信仰のなき人には奇蹟と思はるゝことも、容易に出來得るのである。

神と人との結合、そこに久遠の福音がある。

行　　け

「行きて福音を全世界に述べよ」と。來れとの命に應じて、耶蘇の御下イモトに近づき、更に彼に従ひ、彼れと共に居り、充分なる感化と力とを彼れより受け、立派な信仰を通して、美はしき神々しき人格者となりし、男子も女子も、その内に養へ貯へ充たされたものをもて、福音の宣傳に行けと耶蘇は最後に命じ給ふのである。

受けた恵み、内に熟し、信仰の體驗をなせし人は、そのまゝヂツトしてあ

人は羊より優るること如何許ぞ

さらば安息日に善をなすは可し。

(マタイ傳、十二ノ十二)

ことを覺ゆる。

放膽の耶蘇

モーゼの立法からすれば、安息日は神聖な日である。此の立法の創始の當時は、立法者の精神も生き、安息日に於ける實際生活も、精神的であつた。されど數百數千年を経る内にその精神は薄らいで、儀式的になり形式的に流れ、却つて弊害までも伴ふ様になつた。耶蘇の時代に於ては、これが極端にまでなつた傾向がある。鶏卵でも安息日に生んだものなら食さぬと云ふ状態とまでなつた。

かくまでに安息日が形式化した時に、耶蘇が、片手なえたる人を醫し給ふと直ちに攻撃の矢が彼に放たれたのである。「安息日に人を醫すことは善きか」と。耶蘇は答へて言ひ給ふ「汝等のうち一匹の羊をもてる者あらんに、もし安息日に穴に陥らば、之を取りあげぬか、取り上げるだ

豊太閤が猿をして人を驚かしたと云ふ有名な話がある。彼れに謁見せんとする諸侯が、玄關に入ると、そこに猿がゐて、牙をムキ飛びかゝる状態を見て、豊太閤がよろこぶのが常であつた。處が東北の伊達政宗は之を不快とし、謁見する前に、猿番をウマク説服して、その猿を折檻し、肚膽をぬき、政宗を恐れしめ、數日後に例の如く、その猿のをる前を通過すると、その猿が却つて政宗を恐れて、政宗は堂々と直進して太閤に謁見した。家康は實力をもて太閤に對抗し、政宗は膽の大をもて太閤の先を制した。耶蘇がピラトの法廷に立つて裁かるゝ時に、總督ピラト彼に問ふて言ふ、汝はユダヤ人の王なるか、イエス言ひ給ふ、なんぢの言ふが如し」と、少しも恐るゝ顔色などなく、泰然自若としてゐる處、膽の大なる所以であらう。身體を殺して、靈を殺し能はざるものを恐るゝ勿れと豪語したのもイエスである。底力のある透徹した人間觀をもて、

らう、人は羊より優るゝこと如何許ぞ、さらば安息日に善をなすは可しと。即ち人は安息日の爲めに作られしものでなく安息日が人の爲めに作られたのである。人の世は人格中心で形式や立法中心でない。實に耶蘇は傳統迷信を打破した、直言敢行の人である。その大膽なる態度、群がり來る法教師やパリサイ派の人々を一蹴してゐる概がある。放膽の風貌が目にあたりに浮んでくるのである。

文章規範の前篇に、始めは膽の大なるを要すと云ふ放膽文があり、後篇に小心文なるものがあるが、予は人生問題になると多少文章と異なり始めも終りも膽の大なるを要すると思ふ。一面溫情の人である耶蘇が、古きもの形骸化した宗教に對して、革命的な態度に出でられた、その心的放膽さを敬慕するものである。

人間を恐るな

圍こむ環境が、彼れが天來の使命を靈覺して、地を蹴つて靈界を飛行する時に、もろくも寸斷されてしまふ。時代(環境)が偉人を産むと云ふが、イエスに於ては、彼は時代を創造し、環境を新にするの概がある。

更に彼が旗幟を鮮明にして、ガリラヤ湖畔に或はエルサレムに出沒した時に、四面は楚歌の聲に満たされたのである。古き傳統や立法をもて生命とするユダヤ教徒、パリサイ、學者、サドカイの徒は、何にかの口實を發見して、彼を殺さんと計かる。普通の人間なら、蝸牛の如く、全身を殻の中に入れ恐れおのゝいたであらう。イエスは斷乎として、主義主張を明かにし、敵は敵、味方は味方と明かにして起ち給ふた。而してその勇も膽も人造でなく、神より來り又與へられたものであつた。我れに汝等の知らざる糧あり、此の「知らざる糧」が、彼の膽を大ならしめ偉ならしめ豪ならしめたのである。彼れはマン・メーカーキングでなく、ガット・

目的に向つて直進した彼は偉であり豪のものである。

環境打破

人間は環境に支配さるゝものであると云ふことは、現代の進歩した教育に於ても注意さるゝ點である。孟母三遷の教訓も、少年孟子が、環境に支配さるゝを憂へてのことであつた。處が耶蘇はその環境を打破して奮然として起つた。之れが儒者孟子と神子耶蘇との差でもあらう。母は大工の妻、彼の遊ぶ室は工場、働く仕事は親ゆづりの木工職、竹馬の友は下流の子弟、育ちし町はあらゆる階級を網羅するナザレ、氏や育ちからすれば、當然彼はナザレの木工となるべきであつた。處が地上の親でなく、天上の父なる神に依り、その業をなしこれ我が業なりとして、自覺して起つた耶蘇、恰かも蛇にグル／＼卷かれた雉が、頑強な翼もて羽打すると卷付いた蛇が寸斷され雉の食物になる如く、イエスを取り

だ。

恐しいものは誰れにも恐しい、心配事は誰れにも心配事である。然かし恐しいことでも畏縮せず、正體を認めて覺悟をきめ、心配に逢ふて騒がず、嬉れしいとて狂氣度を失せず、得意だとして逆上する様では駄目だ。据つた膽玉が肝要だ。航海中往々にして、嵐に會ふことがある、けれども自分が船中にある以上は大丈夫だと云ふ信仰と腹とが必要だ。船まさに沈没せんとした時にも、イエスは安々と眠つてゐたことを忘れ度くない。

今日の基督者は、あまりに上品過ぎて、事勿れ主義で、妥協的であるまいか、初代の基督者は今日の主義者の如く、打たれ様が、罵られ様が、攻撃され様が、投獄され様が少しも恐れずに、耶蘇中心の生活と信仰に直進したそこに活氣あり勇あり希望があつた。故にステパノの殉死は、やが

メーカーキングである。ヨハネの記者が、斯る人は血脈によらず、肉の欲ねがひによらず、人の欲ねがひによらず、たと神に依りて生れしなり」と洞破したのも深意のある所以である。故に彼は環境に依りて作られし人にあらで、環境を作り、世界を新に創造した人である。

社會を恐るな

耶蘇は無免許の宗教家であつた。寧ろ免許を要さない平信徒であつたと云ふのが適當であらう。故に當時のユダヤ教より見る時に、彼は危険思想家であつた。社會的には、革命家であり、宗教的には革新家として敬遠もされ批難もされ、それが爲めに殺されもしたのである。

耶蘇の眼中には、恐るゝものは神のみであつた。ヘロデ王をば狐と罵倒し、バリサイの徒は偽善者と叫び、當時の社會人を蝮の裔よと詈つたのである。何者か握るものがなければかゝる大言壯語は出来ない筈

的運動となつて、社會は組織を變じつゝある、衷情遺憾に堪えぬ。予は「神よ吾等に勇を與へ、名譽も地位も、人間的なものとしては棄てゝ、あなたに依りてのみ凡ての榮を得る様に、強い信仰と行動をなす様に恵ましめ給へ」と祈るのである。誰れかは、やがて立つべき人がなければならぬであらう。又神は起たしめ給ふことを信ずる。

耶蘇は社會を率ひて起たれた。彼を中心に新しき流れが、社會生活の中に渦卷を作つたその生命の流れを受けて、現代の社會の流を逆轉せしむべきであらう。

放膽には靈の泉

耶蘇が安息日に善をなすはよしと叫んで、舊宗教舊道德を打破して使命中心の生々した新宗教と新道德とを提唱した、その背景には、神より流れ来る靈の泉があつた。我れに汝等の知らぬ糧ありと云ひ給ふた

てポウロの悔改めの動機と化したのである。使徒時代の基督者は、それだけ眞剣で眞面目で、信仰に熱があつたのである。今日の基督者が、再考奮起せねばならぬ所以であるまいか。

姉崎博士の著を見ると、長崎を中心とした昔の基督者は、ナカ／＼偉いものであつた。彼等の多くは信仰を抱いて、喜んで殉死した。彼等は十字架の死を遂げた貴き文獻を残こしてゐる。之れと比して、今日の基督者は、恥かしくないであらうか。

今日は社會的に基督教は起たねばならぬ時代だ。勞働問題にしろ外交問題にせ、政治教育の諸問題でも、正義人道、基督の精神に反する罪惡に充ちてゐるのでないか。これを自分さへ救はるればそれで信仰生活は充實したと思ふてゐるのは、大なる誤りであるまいか。社會運動の流れは、日に日に基督教の目標に近づきつゝ、實際は却つて非基督教

も、天界より湧き出るか、注がれる靈の泉を靈なる人間が飲んで戦ふ時に、百倍の勇と膽力が出來してくるのである。

ペテロとヨハネの大膽なる態度と活動を見て當時の人々は、ペテロとヨハネが耶蘇と共にありしことを認めたと云ふのである。

吾等も耶蘇と共に、常に靈に於てあるならば、更に放膽な人生に生き使命に生きることが出來る筈だ。靈化そこに生々した信仰と生活が創造さるゝ、神よ力を吾等に注がしめ給へ。而して弱き吾等もその靈の泉に浸つて、直言敢行の徒になり度いものである。

耶蘇は飽まで放膽の人であつた、そは天父に交り無限の力を得給ふた結果である。小心翼翼の小才子の多い今日、信ずる人々のみばかりも、正と義に立つて恐れざる放膽の人であらしめたい。

のがそれである。今日の人々、主義者の如き大膽ではあるが、必ず妥協し又行詰る時がくる。その度毎に新人物の出現を待ち改造を繰り返さねばならぬであらう。されど耶蘇の主義理想に依りて生くる基督者はモット深くして高いものより来るものを所有せねばならぬ。社會の普通人や主義者の知らぬ糧を食し飲み、それに依りて生きねばならぬであらう。かくして主義者の様な否更に大膽な十字架の死を耶蘇の爲めに遂ぐる事が出来れば、己れの救を全ふすると同時に、社會を救ひ國家を救ひ人類を救ふ事が出来るのである。

金剛山の千早城を北條の大軍が、七重八重に圍んで攻め、その上に水道を切斷したけれど、千早城内には、山上の大旱でも決して涸れたことのない五ツの泉があつた。楠正成は之れに依りて水を得、よく戦ふことが出来たのである。人間界と云ふものより流れてくる水が斷たれて

斯て彼らの前にてその狀かはり、其の顔は

日のごとく輝き、その衣は光のごとく白くなりぬ。

(マタイ傳、十七ノ二)

ヘルモン嶺峰の白衣

耶蘇の變貌は、共觀福音書の孰れの記者も證明してゐる。ペテロ後書（二ノ十七）に於てペテロは「大なる威光を見しものなり」と云ふて居る程、直弟子の腦裡に深く印象された大なる事實であつた。

變貌の場所に就いては、舊き傳統には海拔千八百尺のタボール山となすものもある、殊にギリシヤ教會は此の説により八月六日を記念してゐるが、近代の學者の多くは、海拔九千尺のヘルモン山の中腹に於ける出來事となしてゐる。日時は、カイザリヤ、ピリポの旅行に於て、ペテロが「汝は生ける神の子なり」との告白せし日より六日目の夜である。それは耶蘇が祈禱の爲めに祈りに浸らんとする刹那の出來事であつた。變貌は耶蘇傳中の最も神秘的な靜的なものである。理解せんとするよ

草も、風のゆるぎもなく、静けさを深めて、時は刻々に夜へと進むのである。白雲は、漂浪者の如く、ヘルモン山の峰から峰へと流れる。裾野に音をなすものは、羊の群を牧場へと導く牧羊者のみである。沈静な夜に、神のみが最も近く人に語るとか、耶蘇は下界を離れてヘルモン靈峰に、彼等を伴ひ、有限なる人間我を、無限の世界へと開き給ふた。

わづらはしき世を、しばしのがれ

たそがれしづかに、ひとりいのらん

神よりほかには、きくものなき

木蔭にひれふし、父へといのる（原作は、つみになげく）

日本に最初の宣教師として來りしプラオン博士の母君なるプラオン夫人（讚美歌二四一）が、忙がはしき生活の中にありて、しばしそをのがれて夕の祈を裏庭の木蔭にてなせしを想ふ。耶蘇が、ヘルモン山の祈り

りか、寧ろ思ふべきことであり感ずべきことだ。その價值は、象徴的な處にある。神秘的な沈黙、そこに天と地、神と人の會ふ世界がある。變貌の嶺は、神人調和の消息であり、天と地と合する靈界の地平線である。其の顔は日のごとく輝き、その衣は光のごとく白く化した。

無限界に轉向せられたる體驗

耶蘇は十二弟子の中、ペテロ、ヤコブ、ヨハネの三弟子をとくに撰び、變貌の山へと伴ひ給ふた。變貌を背景とした、ヘルモン嶺峯への登山は、ありふれた旅行でなく、彼等三人の弟子を祭壇に捧げ、嚴かなる意義に於て耶蘇自身の幻影、即ち犠牲、死十字架を遠望せしめんとし給ふたのであらう。

黄昏の風光、明かる味の中に、浮繪の如く、展開せられたるヘルモン山の裾野の景色も、薄暮の幕に包まれて、トツプリと暗くなつて行く。樹も

へとの分水嶺であるまいか。彼は已に天界にありてモーゼとエリヤに會し、共に語り、モーゼとエリヤは、耶蘇の使命を充分に理解し、耶蘇も天界の聲を聞き、内面の生命が深めらるゝを覺え給ふたであらう。かくして、モーゼが恰かも、ビスガの山より、ヨルダン河を隔てゝ、カナンの樂土を眺めし如く、耶蘇はヘルモン嶺峰よりカルバリーの山を通して、天界を眺望し給ふた。そこに十字架の死と、復活の曙光を見たのである。十字架は、前面より觀れば、暗黒であるが、後方より見れば光である。此の妙なる變貌の風光を見た三人の愛弟子の靈に深く印せしめられしものは、

身にしみわたれる、 このゆふべの

えならぬけしきを、 いかでわすれん

と云ふ心根こそ此の瞬間に於ける弟子等の印象であつたであらう。

は、これよりも嚴かに、靜かであり神秘であつた。

夜の露は重く、靈峰の雪をかすめて吹くそよ風は、夜の空氣を冷かにする。耶蘇は心ゆく許りに、自己の胸を天父へと開き給ふた。無限の世界へ、我を開き給ふた。その刹那の祈りは、言葉でなく、胸を開いて、上より來る凡てのものを受けんとする態度である。かくして無限の我が有限の我を支配した、その瞬間に耶蘇の顔は日のごとく輝き、その衣は光のごとく白くなりぬ。靈界の最高峰に引き上げられた體驗、そこに變貌の表現がある。

靈界の分水嶺

箱根の峠を分水嶺として、關西と關東の異なる二つの風光を見、ロッキーマウン脈のテンネツシー峠を中心として、東部と西部の米國を分けてゐる。耶蘇の變貌は、生きて人を教へた時代より死して人を救ふ時代

と救との分水嶺であり、二つのまるで異なる風光が現示さるゝ靈界の峠である。

道德の化學

基督教は道德の化學である。罪ある人は神子となり、最惡の人が最善の人となる。進歩せる最新の化學は、石炭瓦斯を水銀アマルガムで分解し、而して後石炭瓦斯の中に、炭素を結晶せしめて、ダイヤモンドを造る。有毒なるものを寶石となすのである、然かも最も貴重なるものとなすのである。瓦斯より廢物としてコールタールなる粗末な塗料が製出さるゝのであるが、更にそれを精製して油、鹽、染料、香水の如き最も美しきものをも作り得るのである。昔の鍊金術からすれば、今日の化學は奇蹟であるまいか。嘗つては代議士までもした、村松愛藏氏が、日糖事件で囚人となりしも、基督を信することに依りて、熱烈なる傳道者と

白衣と化した耶蘇の貌は、外部よりの光に輝かされたと云ふよりかは、そは寧ろ内部的で、内から外へと放射された光である。十字架の死は、弟子等には失望であり障害物であつた。有限と無限との合致點、有限の我が無限の我へと飛躍せんとして、白衣と化したその貌、神々しくも貴くもあり聖くもある。詩聖テニソンが、クラレンドン公爵夫人を弔ふた中に、

葬の鐘の音の哀れさを、天の使は夕の鐘にまして樂しとや聞くらん。
死の姿は生命の朝日照る方に面を向けて立てる。その後影は此の世よりは暗く見ゆ。されど死とは眞の名にあらで、上に行くてふ名ぞそれなる。

と歌ふた節も想出されて、耶蘇の變貌の消息が死と生、罪より救へ、下より上へと引き上げらるゝ神秘さを物語たる。變貌は暗黒と光、亡びと

神秘中の神秘、語るをやめて黙し、説くことをせず、祈る。そこに黒染の衣が白衣となり、罪ある人は潔められ、救はれ、新らしくせらる。變貌の靈峰、雪白きヘルモンの嶺峰、死と生、闇と光、亡びと救の分水嶺となり、今尙ほ靈界の峠となり、死に行く人々を久遠に生かし、有限の我を無限の我れに向上せしめんとしてゐる。

變貌、人を呪ひし顔罪にけがれし心、やがては日のごとく輝き、光の如く白くなるであらう。

うとしたのである。こゝに現はれたモーゼは、立法を代表し、エリヤは豫言者を代表してゐる。耶蘇は此等立法と豫言者の中央にありて、それよりも更に偉大なものであつた。新らしき時代は舊き立法より新しき立法に従ふべく、豫言者よりメシヤへと轉向すべきである。故に光れる雲彼等を覆ふた時、モーゼとエリヤは消へ失せて、耶蘇のみゐまし給ふ。

モーゼの光りは外部より彼を輝せし光であつたが、耶蘇の日の如く輝きし顔と衣は、内より外に發光したのである。受動的でなく自發的であつた。

此の十字架の背景が明かになりし時、十字架は救であり榮光であり希望と化した。此の十字架のみが罪を救に、耻辱を榮光に、人を神にせしむる力があるのだ。

多くの人の贖償^{あがなひ}として

己^{みづか}が生命を與へん爲なり。

(マルコ傳、
十ノ四十五ノ末端)

神人融和の十字架

耶蘇の大使命は、多くの人の贖償^{あがなひ}として、己が生命を與へん爲めなり。神學上の推論としては、贖罪論となるのである。ヘブライ民族の思想に「贖ふ」と云ふことは、獻げものをなして罪を除去する意義があつた。ケンブリッヂ大學のアラビヤ語教授であつた、ロバートソン・スミス博士の研究に依ると、贖罪の宗教的意義は、豫言者の中に見出すことが出来る。それにはヘブライ語のキツバーと云ふ文字は、獻物と云ふことではなく、「拭ひ去る」と云ふ意味だ。即ち罪を拭ひ去ると云ふことだ。更に新約のカタラゲ（ローマ書五ノ十一）と云ふ意義は、融和と云ふ様になつた。英語で云ふアトウメントとは、アット、ワン、メントと云ふことで、一つになるの意である。即ち神と人と一つになると云ふことであるか

なり、多くの人のために罪の赦を得させんとて流す所のものなり」と云ふ。耶蘇の犠牲の死を通して、神と人との關係を新にし、神は耶蘇に於て、人類を救ふ契約をなし給ふたと云ふにある(マタイ二十六の二十八)。又耶蘇の出現は「おほくの人の贖償として、己が生命を與へん爲なり」(マルコ十ノ四十五)と云ふ罪の奴隸と化してゐる人間を買もどし、自由人として解放せんが爲めに耶蘇は來給ふたのであるとなす信仰である。

失はれし人を求めて

それ人の子の來れるは、失せたる者を尋ねて救はん爲なり(路十九ノ十)。耶蘇の來りしは、罪の爲め神の支配の下より失はれ、迷ひさまよふ靈を求めてゐる。

エソウが狩獵より疲れて、歸りし時、弟のヤコブが料理してゐた羹あつものを一杯もらひ受けて飲み、輕卒にも家督の權を弟ヤコブに譲つてしまふた。

ら、神と人と耶蘇なる人格に於て、一つになつて融和することだ。基督教とは神と人と耶蘇に於て、一つになることだ。こゝに贖罪の宗教がある。佛教、マホメット教、神道には贖ひの意義がない。日本の神社に二つの宗教的流れがある様だ。一つは白木作りの神殿、そこには罪の觀念も贖の信仰も全々ないと思ふが、他に朱塗で赤くぬられた殿堂を見る。此の赤色は血を意味し、血をもて罪より人を清むるヘブライ民族の信仰の流れがあるのであるまいか、かく見れば日本の宗教史の中にも、贖罪の福音の深い根があるかも知れない。

ペテロが「されど神は、凡ての豫言者の口をもて、キリストの苦難を受くべきことを豫じめ告げ給ひしを斯くは成就し給ひしなり」(使三ノ十八)と言明して、イエスの苦難は、舊約豫言の完成であることをもつてしてゐる。更に贖罪は「なんぢら皆この酒杯より飲め、これは契約のわが血

國を發見した。耶蘇は靈界に於て、希望と向上の靈力を失ひ迷ひさまよひ、闇を愛し、光なる神にその後をそむけて、滅落の都へと逃走し行く、罪ある人を愛しさがし求めて、巡禮の旅を續け給ふた。己が生命を犠牲にして、失はれし靈を探し求め給ふた。耶蘇は決して罪惡を犯せし人をせめ給はなかつた。見悪い處よりか、人の内面の美しい處を見た、而して悪い所罪ある處は黙して背負ふた。

英國の畫家、ホルマン、ハントの「死の蔭」シャドウ、オブ、デスを見ると、ナザレの木匠小屋を描き、そこには大工の道具、母マリヤ、寶物の匣コが置かれ、横木の上に、立てる基督の影がさしてゐる。横木と立てる基督の貌、そは十字架そのものである。贖罪はモーゼの立法に依りて、實現されべきものでなく、十字架の死に依つてなさるべきものであることを暗示したのが畫家ハントの眞意である。

其の結果エソウは家庭を失ひ、希望も幸福も信仰も失ふたのである。エソウが物質的方面を失ふたことは、やがて彼の信仰的方面をも失ふたことになつた。淀泊すべき港を見失ふた破船の如きものである。伊太利建國者ガリバルヂイの傳を讀むと、彼が、未だ牧童生活をなしてゐた時に羊を見失ふた。そこで彼は徹夜して、羊を探し廻り遂に見出して非常に悦んだと云ふことである。耶蘇が「我が來るはイスラエルの失はれし羊の爲めなり」と云ひ給ふた消息も、靈味津々たる餘情のほどばしりを見るのである。

ギリシヤのアレキサンダア大帝が、世界を征服せんとして、征服すべき國を探し求めた。先哲ソクラテスやプラトーンは、智識を求めて、それを發見した處に、賢者智者哲學者としての使命を果した。コロンバスは、寶玉の世界印度にあこがれ、之に到達せんとして、新らしき世界なる米

じてきたのである。

燔祭として神に捧ぐる疵なき當歳の牡オスの羔マゲサ、楣マゲサに塗るその血として、耶蘇は民族的大祭日に、祭として捧げらるゝ羔、人の罪を負ふ羔となり、十字架上に血を流し、人を救はんと流し給ふ、神の羔の贖罪の血である。過越の食事の前に、四杯の葡萄酒が飲まれた。一杯目の時には祝福をなし、それより手を洗ふて祈禱をなし、二杯目の時には、子は父に質問をなして、父は祭の意義を説明し、詩篇の百十三篇と百十四篇とを歌ふ。三杯目の時に祝禱が捧げられて、四杯目の時には、詩篇百十五篇より百十八篇までが歌はれるのである。

十字架上の血は、此の意味に於て、靈感に充ちるものである。舊き宗教、モーゼの立法は動物なる羔に凡ての罪過を負はせて、人の罪の清められんことを神に祈つた。處が基督教にては耶蘇自らその羔となつた。

罪を負ふ神の羔

バプテスマのヨハネが、洗禮を受けんとして耶蘇の來れるを見て、世の罪を負ふ神の羔を見よと叫んで、耶蘇のキリストなることを宣明した。神の羔とは、過越の祭と密接な關係を有してゐる。申命記と利未記に依ると過越の祭は四月十四日(アビブの月)の夜とされてゐる。時には「種子入れぬパンの祭」とも云はれてゐる。十四日の晩に、羔を殺して、その血を楣(マゲサ)戸、窓などの上の横木の上に塗りつけ、肉は手を觸れずに焼き、種子入れぬパンと苦茶とを共に食し、ヘブライ民族が、エジプトを出で、カナンの樂土へと歸り來る時の苦難を偲ぶ、民族的大祭日である。食物は全部その晩の中に急ぎ食し、翌朝まで残してはならぬ習慣であつた。それにあづかりし人々は、旅の用意をする。それは「主過ぎ給ふ」と云ふ意義を暗示したものである。こゝから過越の祭と云ふ意味が生

罪の子を「救へ」と導き給ふ。

^{ホフラ}屠られる心

人はサイベリヤに住んでゐる動物でもなく、野にある一本立ちの葦でもない。二人三人集つて始めて生活し得るのである。そこに家庭あり團體生活がある。父母が子の爲めに苦む、そこに子が育つのである。大逆事件の難波某の實父が、子の大逆の爲めに、日夜心を痛め遂に病を得て悶死した。此の親心が屠らるゝ心である。耶蘇が罪ある人の爲めに十字架上に屠られ給ふたのは更に貴く深くあるまいか。

英國の文豪、デュエル・デフォアの傑作と云はるゝ、「ロビンソン・クルウソー」の中に、彼が孤島に獨り寂しく、純潔と忍耐、信仰と希望をもて生活してゐた時には、人として餘情の乏しさを現はしてゐるが、偶々土人に殺されんとする人を助けて、彼をフライデーと名づけ彼を助け、彼れに奉

人格を有する耶蘇は、人格者なる神と、人格者なる人間との調和合一を期せんが爲めに、人類の罪を負ふて、神前に捧げられた、ナダメの獻物である。人格者耶蘇そのものが祭壇に捧げらるゝ羔となつた。動物でなく人格者が、神に捧げられた時に、果然新宗教が創始されたのである。此の眞情を耶蘇が、晩餐の席上に於て、愛弟子に示された時程、大なる愛を、未だかつて弟子等に現はされたことはなかつたと、伊太利の基督傳の著者バビニが云ふてゐる。而して之れに依りて神の愛を現はせりと云ふたのは至言である。畫家ホルマン・ハントの「贖罪の山羊」^{スケイプ・ゴート}を見るに、アザゼルの爲めにとして、人の罪を負はされて、「死海」へと放たれた贖罪の山羊、死海の遠方には、アバリチ山脈が聳へ、月と虹とが天空にかゝり、黒ずんだ死海の泥土には、今迄に犠牲の死を遂げた山羊の白骨が散在してゐる。カルバリー山上の「贖罪の山羊」、暗き罪の世界を照らして

姦淫せしものは兩眼を抜き取ると云ふ嚴格な法律を配布した。すると自分の息子はその罪を犯した。すると王は、長子の兩眼を盲にするに偲びず、さりとて法律をまげることすらならず、非常に心を痛めた結果、自己の片目と長子の片目とを抜き、片目一つ宛保存して、愛兒の罪を贖ふたと云ふ史實がある。神は罪ある人を殺さずに耶蘇を殺して人を生かし給ふた。傷口から落ちる聖なる滴を受けて、人は罪より淨化されて行くのである。

親と子、夫と妻、友と友、勞働者と資本家、強者と弱者、教師と生徒との間に此の貴き精神があれば、そこには、喜悅と平和と祝福の生活がある。五重の塔の眞中に一本の柱があつて全體の重みを支へて居る如く、人間と云ふ動搖し易き建物の中心に、耶蘇なる貴き柱があるならば、凡ての人間苦の重みを支へて勝利の生活へと進み行くことが出来るであら

仕し、彼れの爲めに犠牲になつた時に、ロビンソン・クルウソウの人格美は一種の後光をさへ發する心地がするのである。那邊の消息を理解する時に、彼は一個の冒險小説の主人公でなく、人間界に於ける人格者として貴き貌をもて現はれてくる。人の爲めに苦む、そこに犠牲美、社會的精神美が表現されて、神々しき人格の貌が現はれてくる。

月が地球に最も近く寄れば、大きな干潮となる。月の引力が海水を引くのである。耶蘇が人の罪を負ふ心、嘆く心、祈る心が近ければ近い程、人の靈が耶蘇の方に引かれて行く、人心そこに動くのである。天を仰ぎ高きを望み、貴き美しき耶蘇の人格の姿を見る時に、人の靈は火藥の如く、爆發して高きに向つて昇る。故に若し吾等の内に、悔改めて救はれんとする態度がなければ、耶蘇の心は、寸々に斷れるであらう。

昔伊太利のロクレシヤンの王ザルーシヤスが、紀元前六百六十年の頃、

園の中にいまだ人を葬りしことなき

新らしき墓あり。

(ヨハネ傳、十九ノ四十二)

う。牧師は何時も、嘆いてゐるべきである。して何時も迷へる靈の罪を負ふて屠られてゐるべきである。更に基督者凡てが、世の人の爲めに罪を負ふて屠られてゐることが出来れば、人は救はれ世は清められ、第一王國の一步一步が地上に建設されるのである。

人格向上の爲めに苦みなげく人がなければならぬ。耶蘇が人類の爲めに苦み嘆き打たれ冒られ遂に十字架の死をさへ遂げ給ふた。そこに人は、罪から反撥して、神の人格に向つて飛び行かねばならぬ。

耶蘇が多くの人の贖として、己が生命を與へ給ふ。そこに罪の爲めに分離した神と人とは融和され、離れしものは合し、亡びんとせしものは救はれて、新らしき生命の港へと靈船を漕ぐのである。

園の中に新しき墓

カルバリー山上、そこに立てられた十字架、耶蘇の肉體の生命に、最後の止めを刺した處である。その十字架の立てられし處に園があり、その園の中に、未だ人を葬りしことのない新しき墓があつた。こはユダヤの高等法院の議員にして、富めるアリマタヤのヨセフの園である。ヨセフはの耶蘇死せしとき自ら此の園の墓に葬るべく準備してゐたのである。彼は篤信の士であつたが、地位を考ふる處から、世間を恐れて、耶蘇の信者であることを秘密にしてゐたのである。見様に依りては、臆病な人間とも云へるが、十字架に殺されし耶蘇の屍を、ピラトに貰え受けてくるだけの勇氣のあつたことを想ふと、推賞し得べきものがある。若し屍を引き取るものがない時にはローマ政府では放棄して猛

れが爲めには雨期の時に、貯水池に水を充分に貯へて、夕方になりて、花園に水を灌ぐのである。ヤツファとシドンの蜜柑とレモンはかゝる意味に於て有名であり、ダマスコの果樹園は、地上のパラダイスと稱する所以である。樹の葉の涼しき影、泉水の樂奏、夏の夜には神秘の郷土と化するのである。

アリマタヤのヨセフの花園、彼も亦百草を集めて、開花の美を賞讃したであらう。千草の中に、一本深紅の花が咲いた。花瓣はさかれ枝はをられた。そは赤い血の花、耶蘇である。十字架上に、彼を殺せし人々は、園に咲く花を見ずに、十字架上に血を求め、而してその血を見出した。十字架を作りしものは、人間であるが、園を創造せしものは神である。花園は十字架よりも古い。神が天地を創造せし時に、神は先づ草木を最初に作り給ふた創造の世界は、草と花もて充ちた。そこに生けるも

鳥や野獸の食物としてしまふのである。耶蘇の場合に於ては、當然主の玉體を引き取るべきものは、十二弟子であつたのだが、彼等の全部は、已に失望して四散してしまふたのだ。かゝる慘然たる場合に於て、アリマタヤのヨセフが、ピラトに金を支拂ふて耶蘇の屍をもらひ受け、ニコデモと共に、己れの新墓に葬つたことは奥床かしき心根と云ふべきであらう。

園に咲く赤き花

園と云ふことは、ヘブライ語でガンと云ふことで「圍む」と云ふ意味である。果樹園と云ふ意に用ゐらるゝこともあるが、時には公園の如き娛樂と云ふ場合もある。多くの場合に於ては、樹の間に野菜を栽培することもあるが、花を栽ることが多い。長い乾燥するパレスチナの夏に花を咲かせ果實を結ばせるのには絶えず水を保給せねばならぬ。そ

間に退き、或は涼み時には心行く許りに、祈禱の靜壇となし給ひし處であらう。故に反逆者ユダが、耶蘇の居給ふ處を探し求めた時に、此の園の中に容易に耶蘇を見出し得たことであらう。ゲドロンの谷川を渡り、オリブの山の西方、傾斜したあたり、そこがゲツセマネの園であるとされてゐる。今も數株のオリブ樹があるが、古蹟を偲ぶ爲めに、植ゑ繼ぎしたものである。

園に於ける耶蘇の苦悶は神聖である。近くにある弟子と離れて、獨り園の奥深く進み給ひし如く神聖であつた。それは精神的に至聖なる場所であつた。

ニコルがその著基督傳に於て、此の消息を傳へて言ふ「^{スダレ}簾は捲かれて、キリストの恐るべき煩悶と、血の汗と沈落と困惑と慟哭と涙を目前に視るに及びて、此の疑念は解かれざるを得ず」と。げに彼の苦惱は、人間の

のが創造されたのである。人間てふ地平線上に、耶蘇なる深紅の花が咲いた。その花は人の心を慰め、力を與へ、人の生命までも更新し得る神秘なものである。神秘なる花園に神秘なる花が開いた。人類史上特記すべき赤い花である。その色、その香、生命となりて心胸に流がれ入る時に、罪に死せし人の靈を燃え立たしむ。此の深紅の花、冬の間は、根に籠もりて、春風の催すを待つべく、時の來るまで地の中に休みぬ。

ゲツセマネの園

耶蘇存命中に、最も高唱されたものは、ゲツセマネの園である。こは三福音書共に仔細に記述してゐる。ヘブライ書の記者は、その眞狀にまで觸れてゐる。彼肉體に在りしとき哀み哭し涙を流がして、己を救ひ得る者に祈り、其敬畏によりて、聽かるゝことを得たりと。

雨少なきパレスチナの常夏、耶蘇はエルサレムの郊外、ゲツセマネの樹

救拯の眼目を達し得るならばと思ひ給ふたことである。然しその末端に至るといさゝかの背反の心なく、承服の心を見る。肉體の苦痛衝突を閱みして後全く靈の法則に吸収せられてゐる。人は自己の罪惡に就きて悲む心あると共に、内なる深い處には、全からんとし、向上せんとする至情があり、大ならんとする渴望心が潜んでゐる。その目的を完成せしめんとする、そこに十字架の半面がある。人間の一面にはかくの如く、ギラツクものが見度いのである。

死の苦酸去りて耶蘇はゲツセマネの園より起ち給ふた、抵抗は終はり承服の世界へと進み給ふ。園の中に新らしき墓あり、ゲツセマネの園より、墓ある國へと行き給ふ。

翌日越ゆる峯

詩人松井壺月の作に「翌日越ゆる峰を見せたり今日の月、彼が小田原か

爲めには指導であり慰藉である。吾等是不幸悲哀の時には孤獨である。親も兄弟も友人も、多くは間口だけの同情が多い。否心靈の悩み、苦痛となると、人の力では心靈の堂奥まで深く入り得ない。靈は靈に叫び、魂は魂の答を得ねば喜びと満足はないのである。至親の情も我が深い心靈の創を癒やすことは出来ない。

ローマの逆政の時代に、夫婦のものあり、政の苛き世の中に倦みて、自殺せんと決心し、妻は先づ刃を取りて胸に刺し、之を抜き断え――なる息もて夫に云ふ、之を取れ、之なれば痛はあらずと。吾等の胸に刺さるゝ人生苦惱の刃は、かつてキリストの血に染まりたるものにて、已にキリストの胸を刺したるによりて其の鋭き痛さと煩悶は奪ひ去られてゐる。「父よ御旨ならば、此の酒杯を我より取り去りたまへ、されど我が意にあらずして、御意のならんことを願ふ」。若し十字架の死なしに、人類

分離し分解を始めた時、そこに死があるとなしゐる。死はかくして生命の終末であると斷定した。されど基督教は、死は完成への階段であり、生命進化の界に過ぎぬと信ずる。科學は解剖であり分解である、基督教は總合であり結合である、そこに生命は廻轉向上の途につくのである。「晝も夜も吾が血管を走り行く生命の流れは、全世界を貫いて走り、律呂的音調を發して躍る。其生命は欣喜雀躍として地球の塵埃を貫いて發射し、無盡の草の葉の中を疾走し、木の葉や花の騷波亂浪となりて碎く、其の生命は潮となり、河となり、生的大海、死の大海の搖籃の中に搖らる。吾は此の生命の世界に觸れ、吾が四肢五體の光榮に造られたることを知る而して吾が誇りは、現に吾が血汐の中に躍れる幾時代の生の脈搏より出で來る」と、印度の宗教詩人ダゴールは言ふ。そこに生の永遠味がある。

ら、明日越えなんとする箱根の峰を見て、明日行くべき途を思ふ。越ゆべき山は峻しく、不安と心の重さを感じて居た時、夕の月が煌々^{くわくわく}と輝り、未踏の山嶺、明かに見えて、希望に充たされたのであらう。そこに峰を見せたり今日の月との靈感が涌出してきたのである。

ゲツセマネの祈禱の靜壇より、新らしき墓のある園を耶蘇が思ふた時に、苦痛と悩みと不安との幕にとざゝれたる風光を見た。されど地上に落ちる血の如き汗の雫^{しづく}を拭ひ去りしとき、翌日越ゆる峰を見せたり今日の月^レの靈感深く、勇氣百倍して十字架の重荷を負はんとし給ふた。前庭に神の創造になる花を見た時に十字架は美であり壯てあり希望と化した。

「死」それは凡てのものゝ終りであり、人生の斷末魔であると云ふ。近代の科學は、人の生命は元素の結合よりなるので、若しその構成せし元素が

奥を開き、悲哀と不平と不安にのみかられ易き人生に對し、喜悅と希望と満足と感謝とをもて、父の御下に歸り行く、恰かも凱旋將士の如き、男々しさを現示し給ふた。

園の中にいまだ人を葬りしことなき新らしき墓あり。園の一角の樹間、そこに一つの石あり、その石を開いて、アリマタヤのヨセフは耶蘇の玉體に、ニコデモのもたらせし、沒藥沈香の混和物を百斤ばかりぬり、布にて巻きて後敬度の態度もて、新らしき墓に耶蘇を葬つたのである。

ダストルが「一生の終りに死の必要なるは、恰かも一日の終りに眠の必要なるが如し」と言ふたが、耶蘇の地上に於ける「狐は穴あり空の鳥は巢あり、されど人の子は枕する處なし」てふ激烈なる奮闘と活躍は、死の休息を要したのである。萬里雲盡くる處長江水清しとか、耶蘇の死は、生命の流が、生命の大海へと流れ込んだ消息を傳へてゐる。そこには生

赤穂義士の一人、早水藤左衛門が、その辭世に、「地水火風空の中より出でし身の、辿りて歸る元の住家に」と歌ふたのも、生命は生命の住家に歸へる福音の一片を残こしたものである。偉なるものは、其の死場所を撰ぶ、そは其の骸を汚さむことを恐るゝからである。狐でさへも死するときは、岡を枕にすと云はれ、釋迦の涅槃は、頭北面西であつた。俎上に載せられた鯉が、あの萬丈の瀑布をも飛行し得る勢あれど、鰭一つだに動かさずして泰然自若として死に就くのである。科學者ケルビン卿が、小さい一ミニオネツトの花にすら、天の星よりも多くの神秘を宿してゐるとの信仰に到達したと云ふ、カルバリー山上新らしき墓のありし園の中に咲く深紅の花、人生のあらゆる難問題に對する解決を暗示して尙ほ餘韻あらしむ。夫子は「未だ生を知らず焉ぞ死を知らむ」と、生は神秘であり死も亦神秘である。耶蘇は此の死生を貫いて、人生の堂

暫くせば世は復われを見ず、されど汝らは

我を見る、われ活くれば汝らも活くべければなり。

(ヨハネ傳、十四ノ十九)

命の喜びに溢るゝ靜肅の世界がある。やがては欣喜雀躍として、神秘の奥底から浮き上つてくる世界である、喜びの閃は人の心の絃線に觸れる。歡喜の湖上、胡蝶は帆をあげて、光明の海を走り、百合の花は、光の頂にやさしき頭を擡げてゐる。「死よなんちの勝は何處にかある、死よなんちの刺は何處にかある、死の刺は罪なり、罪の力は律法なり、されど感謝すべきかな、神は我らの主イエス・キリストによりて勝を與へたまふ」と。園の中に咲く、深紅の花、死生を踏破したシンボルとなる。新らしき墓は古き死の凡ての傳統を打破して、人生の勝利を傳ふ。

復活と久遠の靈潮

「暫らくせば世は復われを見ず」とは、耶蘇が親しき弟子等と、心行く許りに話し合ふた時に我れ死して後、汝等は暫らく我れを見ないであらう、されどやがては、我れを見んと、復活の暗示を彼等に語り給ふ。ヨハネ二十章の復活の状況を述べてある處は、ヨハネ記者の復活せし後の記述であるが、此の十四章は、耶蘇自身の告白であり、内面生活の物語である。復活後の記録が外的なものであるとせば、耶蘇の復活の宣言は内的なものである。此の二つの記録を總合して、復活の過去現在未來を窮明することが出来る。

一週のはじめの日(日曜日)の朝早く、太陽未だ昇らず、うす暗き頃ほひ、マгдаラのマリヤが暮參すると、墓の蓋になつてゐた石が取除けられて

んと思ふて「君よ汝若しイエスを取り去りしならば、何處に置きしかを告げよ、われ引取るべし」、耶蘇「マリヤよ」と呼びかけると、マリヤも釋然として耶蘇なるを知り、「ラボニ」即ち先生と言ひ寄る。すると耶蘇は「われに觸るな我れいまだ父の許に昇らぬ故なり」と。マドリット府のブラドウにある伊太利畫家コレツギオの作になる「ノリ、ミー、タンゲレ」即ち我れに觸るな」と云ふ有名な繪を見ると、綠なす草木を背景として、右には左手を天上に指しむけて立ち天の父の許に昇ちぬことを教えてゐる耶蘇と、左には黄金色の衣を着、赤色の外套をまとふてゐるマリヤが座して、手を背後にむけて驚きを表はしてゐる。色彩の配合と、情緒の切なる表現と、さながら當時を偲ばしむるものがある。

石の墓より轉びたるを見

三日前にはカルバリー山上、血の雨が降り、人類愛の結晶とも云ふべき

あるので、驚いてシモン・ペテロとイエスの愛し給ひし弟子(ヨハネ)等のもとに走り行きて言ふ、誰れか主を墓より取去れり、何處に置きしか我ら知らず」と。そこでペテロとヨハネは急いで墓に行つたが、ヨハネが壯年なので、一步早く墓場に着した。ヨハネは屈みて墓の内部をのぞいて見たが、墓の中には入らなかつた。只その中にはイエスの屍を包んだ布片のあるのを見るのみであつた。するとペテロが遅れてきたが、墓の内に入つて見ると、布があるが、首を包んだ手拭が布と一所の場所になく、別の處に巻きつけてゐるのに氣が付いた。そこでヨハネも墓の中に入つて、耶蘇の復活を確めて後信じて歸路についた。墓の外に立つてゐたマリヤは泣きながら墓の内を見ると、二人の御使が屍のおかれし首の方に一人、足の方に一人立つて居るのを見た。振り反つて見るとイエスの立てるを見たが、マリヤはそれに氣付かず、園守なら

復活は、罪が鱗の如く、目より落ち去り、喜びと感謝のない人生、闇みの中にとざゝれてゐるものを、明るみに出し、喜びと希望と光明の人生を眼前に轉向してくる。

下でもなく後方でもない、上を見よ、そこに復活の世界がある。罪のない死のない暗みのない世界である。教會は變化し、形式は死し組織は變更される、されど耶蘇は久遠に變らず、昨日も今日も、いづまでも變ることなく生き働き導き、全人類を生かすのである。心象研究の大家、マイヤース博士が、その名著、ヒーマン・パーソンナリチー、エンド・イフチ、サーヴ・アイヴアル、アフター・バデリー、デツス「人格と死後の生存」の中に云ふてゐる「予は大膽に云ふ、今後一世紀後に於て、凡て理性に富んだ人は、基督の復活を信ずるであらう」と。世界大戦以後、靈魂の不滅を信じ復活を信ずる人々の激増せしことは、著しき現象である。

空虚な墓を見

耶蘇は殺されて葬られたのである。處が今朝は黒き幕が切り落されて、天來の射光が地上に投ぜられたのである。「死は死せり」てふ福音が、生の宗教の提唱となつて示現されたのである。發見は人的な榮光であるが、默示は神的であり靈的である。復活の默示は、超人間的で久遠性に充ちてゐる。

アリマタヤのヨセフの新墓の蓋石は轉び、耶蘇は死を倒破して復活した。死の印授である石は除去されて、久遠の生の光が發射したのである。復活は人生の秘密を封切りしたのである。人生は秘密であり不可解である。赤兒として生まれ、青年となり壯年と化し老年と轉化する人生、そこには貧しきもの、富めるもの、學あるもの無學なるもの、聖者あるかと思ふと罪ある人は無限に數多い。人生は封印された秘密箱の如きものである。幸福かと思ふ間に逆境に變じてしまふ。されど

肉體は、普通の空間に支配さるゝものでなく、變化してゐたことを認むべきであると思ふ。更に予はペルシャの宗教の中にある、アストラルバデー即ち靈體をもて耶蘇の復活を説明し度いと思ふ。純なる靈でもなく、肉體でもなく第三の肉體であり靈である。即ち靈體と化したのであると思ふ。而して或る學者の如く福音書の記事の一つを是認して、他を否定するでなく二つの記事を事實として、そこに調和を見出さんと努むるのである。

哲學者スピノザは、復活を信じなかつたが、佛國の神學者サバチエの如きは、奇蹟を信じ得る人なら復活を信ずることが出来ると言明してゐる。闇黒なる墓の中に、奇麗な花が咲いた。善と喜と平和と愛に充ちた靈體の花、それは復活の射光を受けてのみ、色彩の美を發揮し得るのである。而してその花は畫家ラファエルの繪よりも美しく、キャノヴァ

轉がりし石を見、更に空虚な墓を見るのである。空虚なる墓、そこには葬られたる耶蘇の肉體はないのである。こは議論でも推論でもなく、事實であつた。此の序を見ると、肉體の復活を意味してゐるのであるが、その復活せし耶蘇が、最後の晚餐を持ちし、エルサレムの二階座敷に、數多の弟子の前に現はれたる時には、戸も開かず音も立てずに室内に入り給ふた。耶蘇の復活が肉體であるならば、少なくとも空間に支配されるのであるから室に入るなら必ず戸を排して入るべきである。こゝが學者の説の分かるゝ處である。故に進歩派と稱する學者は、靈の復活を主張す。されど此の派の學者の弱點は、空虚なる墓の事實を如何に説明せんとしてゐるのであるか。靈の復活であるとせば、葬られた墓場には屍がある筈である。そこで予は、福音書に描寫されたる二つの事實、空虚なる墓と、二階座敷の出現とを調和して、復活せし耶蘇の

てイエスなるを認めたのである。

そこに悲みが喜びとなり、失望が希望となり、失敗が勝利となり、死が生命となつたのである。クルソン、ケルナハンの「戸の外の顔」の中に、妻にも子にも死別して、今病みやつれて死を待てる老人の物語りがあるが、その老人が、忘我の境裡に、美妙なる音楽の聲を聞き、美しき彩光の中に戸の外を見ると最初に死せし愛兒の顔、妻の顔、母の顔が漸次に見えてくることを描寫してゐる。そこに彼は地上界と天上界の神秘の世界を展開してゐる。靈界の消息を度外視しては理解し得ない現象である。「ほのぼのと明石の浦の朝風あさなみに、島かくれ行く舟をしぞ思ふ」と云ふ詩想、靈潮みなぎる靈海の船を靈と見ると、歸天の途に就く、靈は島がくれに、失せては見え、見えては隠くれて、父の御もとにと進み行く風光、詩であり藝術であり、宗教である。

スの立像よりも立派であり、音楽家モザートの合奏曲よりも神妙に、詩人プラウニングの詩よりも餘韻がある。

耶蘇自身を見

轉びし石、空虚なる墓、更にそこに耶蘇自身を見るのである。復活の中心思想は、外部的な、物質的な外界のものでなく、そこに耶蘇が居るや否やの問題である。天使が幾人居つても、そこに耶蘇が居らなかつたら何の役にも立たない。凡て此等のものは、耶蘇の復活を説明し裝飾するに過ぎないのである。復活せし耶蘇があつてこそ意義をなすのである。ルカ傳の記者は、エルサレムより三里ばかりあるエマオの村に行く二人の弟子のことを詳述し(二十四章)途中耶蘇のことを論じ合ふて行く内に、夕方になり日まさに暮れなんととして共に食事せんとせし時、復活せし耶蘇がパンを取り祝し擘^ずきて與へ給へば彼等二人目開け

終りの床の遺骸は、

ありし名残を見すれども、

はやその魂はとこしへの、

波にかくるゝカモメ鳥。

若く幼き魂は、靈潮漲ざる靈海の、男波女波にかくれ、神の愛てふ引力に引かれつゝ前へ前へと行くのである。「我れ生くれば汝等も活くべければなり」とは耶蘇が確信をもて言明した真理である。

復活せし耶蘇は、靈海の干潮(死)と満潮(生)の波間に出没して、死を征し生を高唱して、人生の新局面を展開しつゝ活動し給ふ。今や靈潮は、黒味を帯びた死の岩の岸を洗ふて、淨化されたる久遠の靈海へと吾等を引き上げ給ふ。「暫らくせば世は復われを見ず、されど汝等は我を見る」とは耶蘇の御言葉である。明石の浦の朝風に、島かくれ行く舟、波にかく

露西亞の文豪、ドストイエフスキーが、愛兒ソニヤを失ふた時、友人が彼を慰めて、「また出来るだらう」と云ふた時、ドストイエフスキーが、「予は如何なれば、他の小兒を愛し得んや予の欲する處はソニヤである」と、死亡せし愛兒の外に愛は分割し得ないのである。予の欲するは耶蘇である。耶蘇をおいて他に求むべきものがないのである。弟子等の見たのは復活の耶蘇であつた。

島崎藤村氏が愛女を失はんとせし、その終焉の夕を叙して、

潮は落ちて歸りけり、

生命の岸を打つ波の

やがて夕に回れども、

ひきとゞむべき術すべもなし、

〇〇〇〇〇〇〇

我が國はこの世のものならず。

(ヨハネ傳、十八ノ三十六前半)

るゝカモメ鳥、暫らくせば世は復われを見ず、死てふ島にかくるゝ耶蘇、詩人はかくるゝ貌のみを叙して、「されど汝等は我を見るてふ復活の福音を忘れてゐる。詩人の心と耶蘇の信仰、人生に死あつて復活を知らぬ藝術は、死を體驗して、生の宗教を高唱する耶蘇の宗教に及ばない感じがする。復活なき藝術は暗黒であり行詰である。そこに久遠の宗教が必要である。汝等は我を見る。復活は事實であり、あらゆるものに超越した信仰である。

第一王國の創始

耶蘇が「若し我が國この世のものならば、我が僕ら我をユダヤ人に付^つさじと戦ひしならん」と、ピラト法廷の前で言明されてゐる。此の世の王國とは、北歐のイブセンが云ふた「第三帝國」で、常に云ふ帝國主義である。當時若し耶蘇が此の理想をもて、起ちしならば、ユダヤ民族を結合して、羅馬帝國に反旗を翻がへして獨立軍を起こしたであらう。弟子等の内にも耶蘇の運動を純政治運動と思ふて従ふたものが多かつたのである。處が耶蘇の運動は「此の世のものならず」で、第三帝國建設の獨立運動ではなかつたのである。彼の運動は眞理に付きて證かし、眞理に屬するものは我が聲を聞くと言明して叫ばれたのである。彼の運動は神中心、眞理中心の運動であつた。之を神國建設の運動と云ふの

思想發達の道程からすれば、個人とヤーベ神の關係から出發してゐる。豫言者エレミヤは、個人は自己を改造する力がないので、ヤーベ神の助力に依りて生きることが出來るとなしエゼキヤも之を高調した。一般的からすれば、舊約書に於ては、第一王國(神の國)の言葉は使用されてないのであるが、暫時個人的思想より、民族的思想にまで發達した。彼等の間には、「イスラエルの集團」てふ思想が醸成されつゝあつたのである。ヘブライ民族の民族的意識が、濃厚になりつゝあつたと云ふことは、ヤーベ神を中心として統一されたる思想から構成されたのである。紀元前六世紀の豫言者オバデヤは、「ヤーベの日萬國に臨むこと近し(オバデヤ書一ノ十五)」、而して國は、ヤーベに歸すべし(二ノ二十一)と結論してゐる處を見れば、ヤーベ神の撰民としてのイスラエル國が中心となつて、世界萬國が統一さるゝ日の近きことを暗示してゐる。ヤ

であるが、予は第三帝國運動と對照して、第一王國の創始運動と云ふのである。

此の理想はヘブライ民族の民族的思想であつた、バプテスマのヨハネに依つて絶叫され、耶蘇に至りて更に明かになつたのである。こは神と人との關係を密接にし、引いては人と人との關係を支配するのである。前者は人間世界に於て、神意の統一となり、後者は人類社會運動の聖化となり理想となるのである。近代に於ては「カント、シュライエルマッヘルとなり、リッチエル學派の神學の基礎をなし、現時にありては、ラウシエンブツシュ等の社會的宗教運動の中心思想となり、社會福音」と化したのである。故に此の第一王國の理想は、廣くして且つ深いのである。

ヘブライ民族の理想

中心となりて救は國際的に完成さるべきことを主張してゐる。豫言者ミカは此の意義を更に明かになしてヤーベ神の家の山、諸の山の巔に立ち、諸の嶺をこえて高く聳へ、萬民河のごとくに流れ歸せん。即ち衆多の民來りて言はん、いざ我等ヤーベ神の山に登り、ヤコブの神の家にゆかん、ヤーベ神その道を我らに教へて我らにその路を歩ましめたまはん。律法はシオンより出で、ヤーベ神の言はエルサレムより出づべければなり。彼れ多くの民の間を靱き強き國を規戒め遠き處にまでも然かしたまふべし、彼等はその劍を鋤に打かへ、その鎗を鎌に打かへん、國と國とは劍を擧げて相攻ず、また重て戰爭を習はじ」と、此の日は壓迫はやみ正義と愛が地に満ちて、國際的に戰爭は休み、神を知るの知識地に充ち、あらゆる國はヤーベ神のもとに悔改め、エルサレムを中心として「偉大なる靈の帝國」が實現せらるべしと。「日の出る處より没

ーベ神の日には、イスラエルの敵は判かれると共に、イスラエル自身も淘汰せられ審判せらる（アモス書三ノ二）。かくしてヤーベの日の來るまでには人心更新せられ、平和と正義の國が來るであらうとは、豫言者アモスの叫びであつた。ナホム、ハバククも同じ使命を力説した。

淘汰洗煉の後ヤーベ神の恵みに浴し得べきものは、イスラエル國人のみなるや、それとも彼等が異邦と稱する外國も此の恩恵を共に受け得るやとの疑問は、豫言者の間にも二説ありしも、ヤーベの日（神の國）の來る時には、國際的のものであることを高調せしもの多かつたのである。第二イザヤの章を見ると罰でなく恵をもて、イスラエルを救ひ世界を救はんとする思想がある。「僕の歌」と稱さるゝ四十二章及び四十九章（一ノ六）の内に「我また汝をたてゝ異邦人の光となし、我が救ひを地のほとまで到らしむ」。茲に於てイスラエルはヤーベ神の僕となり、此の僕が

意義を有する様になつてきたことである。豫言者はイスラエルの國神としてこのヤーベ神を信じ、漸次世界的にまで擴大されたのであるが、未來記文學に於ては、世界的より永遠的なものにまで進化し、かくして新約の宗教となり、其の使命更に明白となるに至つた。

耶蘇の第一王國

豫言者起こらざることこゝに五百年、イスラエル國は興き又亡んでしまふた。こゝに於て駱駝の毛衣を着、腰に皮の帶をして、蝗と野蜜とを食して熱烈なる豫言者の精神もて、バプテマスのヨハネは「神の國は近けり」と叫んで荒野に現はれた。而して彼の神の國は急激に來り審判の日なることを告げた。こゝは未來記文學の思想信仰に最も近きものである。ユダヤの國は亡び、ローマ帝國の屬國と化した時でありしが故に、愛國の士其の聲を聞きて、肉躍り、神國來の信仰は彼等の生命をも

する處までの列國の中に我名は大ならん」とは、豫言者マラキの使命であつた。

されど豫言者の時代は去り、神が現在の歴史の中に働き理想の國を來らすてふ豫言者の思想は去り、民心は頻りに現在を悲觀して、未來にのみ望みを置くことになつた。かくして、未來記^{フューチャリクス}文學が生まれ其の時代となつたのである。未來記の思想は、神の國の來る前に、急激なる大變動が起り、世界は破壊せられ而して後メシヤの來臨となると云ふ思想が盛んになつてきた。此の變動が一萬年ほど經て來るとなし、ミレニヤム説ともなつたのである。此の説は遂に終末的^{エスカトロジイ}世界觀となり暗黒な人生と世を化せしめた。ダニエル書の如き此の時代の產物である。「來るべき代」とは、即ち第一王國卽位の日であつたのである。此の文學の長所は悲觀的ではあつたけれど、著しく世界的となり永遠性の

外面的な制度文物よりも、内より外に進化發展すべき生命の文化である。故に權威や武力もて人にのぞむものでない故、人は自由意志もて、悦び勇んで潑刺たる生命の所有者として活躍するのである。個人と神、社會と神そこには靈味津々たる飛躍がある。こゝに於て神に觸れた生命と生命との共鳴、人と人との關係は、愛であり自由であり平等であり正義である。彼がパリサイ人の間に答へて「神の國はかしこにあり、こゝにあると云ふべきものでなく、神の國は汝等の中にあり」となしてゐる、故に耶蘇の意義は、未來記思想やパリサイ派の如く將來に屬すべきものでなく、現在にありとなしたのである。かくして彼の主張し建設せんとせし第一王國は、現在より將來に渡つて進化生長すべきものの、常に世界人心を神の意志に服従すべく、改造し創造して「日に新、日々に新なり」てふ新事實の上に建設さるべきものとなつた。

やし、直ちに時代思想となつたのである。此の思潮に竿さして「神の國は近けり、汝等悔改めよ」と絶叫してナザレの耶蘇が野の人となつた。

耶蘇の説きし「神の國」は、豫言者の如くダビデ王家の再來とイスラエルが異邦國を支配することを説かず、されど豫言者の如く、神自身が統治すること、而して其の倫理的意義は更に高調せられ純化せられ彼の思想の要素をなした。芥子種子カラスダネ又はパン種子の例をもて、神國は小より大、靜より動に生長し轉化すべきことを力説し其の意義も内面的人格的なものになつた。救はれた聖化された人格が大なるものゝ土臺となり基本となつて神國を創始して行くべきことをもつてされた。彼れは此の意味に於て、第一王國の創始者である。此の第一王國は、神の意志の行はるゝ處に存在し實現さるゝのである。神の意志は聖喜聖愛の意志にして、その政治は自由であり道德的であり精神的である。

ことが、第一王國の生活の條件である。露國のゴルキーの「ドン底生活」の内に、美しき相互扶助の生活の場面がある。相互扶助の生活は、上流階級に輕んじられて、却つて貧しき社會に行はるゝを見、耶蘇が貧しき階級に残れる道德に永遠の意義を與へて保存し、第一王國の生活基調とされたことは、皮肉でもあるが貴きことである。第三は、平等の生活である。

高位高官は社會の設けたもので神國の要素ではない。大人も小兒の如くならねば神の國に入ることが出來ぬ。第一王國には、男もなく女もない、學者もなく無學者もない、貴族もなければ新平民もない。水平の道德は已に耶蘇に依りて、二千年前に提唱された問題である。「女の生めるものゝ内で、バプテスマのヨハネは大なり、されど神の國のいと小さきものも彼よりは大きなり」と。此のパラドックスは耶蘇でなければ

第一王國の理想生活

耶蘇の第一王國の理想は第一、無限に赦す生活である。七度を七十倍して赦す恩寵の生活である。罪ある人を責め苦めることは決してその人を活かし新にする以所ではない。罪あるを自覺した刹那、我れ赦されたと思ふ時に、心靈は醒め、その靈は靈の神を求め慕ふて止まざるものとなる。目にて目、齒にて齒を償ふ復讐の道德でなく、あくまで寛容にして溫情もて罪を赦るし人を更生せしむるにある。第二は、相互扶助の生活である。人の子の來るは、人を使ふ爲めに來りしにあらで、人に使はれん爲めである。資本家が勞働者に使はれん爲め、官吏は市民に富者が貧しきものゝ爲めに使はるゝ精神が漲つて動くことであるならば、今日の社會問題の全部が解決するのである。耶蘇が弟子の足を洗ひし態度、よきサマリヤ人の實行が、各階級各自の間に行はるゝ

るけれど、神の愛に依りて聖化さるゝ時そこに第一王國が出現するのである。第五は、正義である。今日の資本が如何に不義に使用されてゐるか、實業家の多くは、どれだけ正しく商賣をやつてゐるであらうか。勞働者の血を吸ふて勞せずして豪華な生活をなしてゐる人のなくなるまでは第一王國は來らない、世は不正不義に充ちてゐる。そこに弱きものは強きものを殺さんとし、弱きものは團結して、強きものに當るストラトイキが起きてくる。恐るべきは、私心私慾の個人、偽善と虚偽に飾られた社會である。

獨逸の文豪ゲーテが「宗教なき處にあるものは模倣か、然からずんば繰返しのみである」と、耶蘇が神の國の創始者である以所のもの、そこに宗教あり生命あるからである。今日の基督教會が、此の宗教と生命を耶蘇より受けて起つ時に創造あり建設がある。第一王國の建設と創始

ば言ひ切ることの出来ぬ宣言である。人爲的なあらゆるものは打破されて、神を中心として平等化さるゝのである。第四は、愛である。吾等の現在の生活は愛すべきものさへも愛することが出来ずに悲劇が繰りかへされてゐる。どれ丈妻は夫を愛し、親は子を、子は親を、姑は嫁を、嫁は姑を愛してゐるであらうか、毎日愛の分列の爲め破壊の爲め滅び行く群で社會は充ちてゐる。人間の愛は掠奪であるが、耶蘇は敵をも愛すべきことを教へ又實行された、愛の行者である。此の無限の愛こそ第一王國の根本義である。國と國、大國と小國との間に此の平等の愛が實現される時に、獅子の子が人の子と遊び得る社會が生まれ、久遠の平和が來り、不良少年も少女も地を拂ふてなくなるであらうげに信仰と希望と愛と此の三ツの者は限りなく存らん、而して其のう。ち最も大なるものは、愛なり。私心私慾な人間の愛が、神々しき閃きがあ

昭和三年十月一日印刷
昭和三年十月五日發行

【定價壹圓五拾錢】

【郵稅八錢】

著者兼
發行者

東京府東詔布町田園都市八十九號

小平國雄

印刷者

東京市神田區旭町七番地

大沼勝藏

印刷所

東京市神田區旭町七番地

大沼印刷所

不許
複製

發行所

東京市京橋區
銀座四丁目一番地

基督教書類會社

振替東京二二三番
電話京橋四五七三番

は、有形の集團なる教會によりてなさるべきものである。されど第一王國は教會よりも、根本的であり、廣くして大きい。神の國は教會そのものであるとなされた中世紀、そこに行詰つたものがある。教會は第一王國建設の宣傳所であり、創始の先驅者であるが、耶蘇の國はそこに止まらずして、そこを中心にして人類的に大きく深く、創造の世界へと進むのである。かくして地上の人類社會を背景として、此の世のものならざる世界を創造して行くのである。

小平國雄著

新刊

唯物史觀と基督教

内 一、唯物史觀 二、マルクス主義の眞相

四六版 三十頁 定價 二十錢

容 三、基督教の主張 四、唯物史觀と耶穌の宗教

現代の日本はマルクシズム全盛の時代である。近時彼等は『無神論』を主張して、宗教に對して挑戰してゐる。吾等は之に對し答もし、批評もし、主張もせねばならぬ。此の冊子は、社會主義無神論に對して基督教の『有神論的辯證』を試み、耶穌の指導精神を高唱したものである。敢て大方の清讀を冀ふと共に、思想的傳道用として使用さるゝに至れば幸である。

發行所

東京市赤坂區新町四丁目三番地

日本基督教會事務所

振替東京六九四四七番



GTU Library

2400 Ridge Road

Berkeley, CA 94709

For renewals call (510) 649-2500

All items are subject to recall

